
とりっぷ INふぁんたじー世界

T . M . m a g i c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりつぶ INふぁんたじー世界

【コード】

N5001G

【作者名】

T・M・magic

【あらすじ】

ごく普通の高校生だった深紗斗は帰る途中に輝く花を見つける。その花から出てきたのは、妖精・サトウ。ツッコミどころ満載の彼女(?)に振り回され、なんと異界に拉致られてしまった。帰る方法は、ただ一つ。異世界に住む人々と魔物の“戦争”を止める事。さまざまな人との出会いの中で、深紗斗が見出す真実とは？

この小説はざしきのわらし(W3222A)と佑川芭瑠堵(W8589C)がコンビを組み、交代で物語を進めて参ります。やはり文体の違い等が見られると思いますが、予めご了承下さい。

第0話：始まりの物語（前書き）

この小説は、二人の作者により作られる物語です。
よって！” 佐川芭瑠堵”と”ざしきのわらし”が交互に書いていきます。

今回が佐川芭瑠堵ターンッ！！

第0話：始まりの物語

昔々の物語。

ある国では、人の王が中心となって幸せに人々は暮らしていました。

しかし…そんな幸福しあわせも長くは続きませんでした……。

突如、現れた……謎の生き物。

彼らは…醜い容姿、強い”負”^{まじやく}の力をもつ……それを人は「魔物」と呼んだ。

そんな魔物に恐れを抱いた、当時の王様は滅ぼそうと考えました。

そして、王様は民にこう言い放ったのです。

『我々が安心して暮らすために…魔物を滅ぼせ!』』

それから……”ヒト”と”魔物”は、憎しみ対立するようになりまし
た……。

互い……自分たちが生きる為に。

辛く厳しい……時代の幕開けとなった……。

戦いは、思ったより長引き……苦しい生活が続きました。

それを見た”妖精”たちは、ヒトと魔物……仲介役を請け負いました。

妖精達の聖域を境に……ふたつの領域を両者に分ける形に……

ヒトと魔物の戦いを一時停戦に持ち込めたのです。

そんな形ではありませんが……また平和は戻りつつあったのです。

けれど…それは長く持ちませんでした。

ある小さな解^ほれが…また…怒り 憎しみを呼び覚ましたのです。

こうして…停戦になった”ヒト”と”魔物”の間は…ひびが入り

今にも崩れそうな勢いで……。

そんな仲を心配した”妖精”達は…また、平和にならないだろうか
と相談していました。

この…今にも勃発しそうな、醜い争いを……止めるにはどうするべきか？と…。

第0話：始まりの物語（後書き）

相方のMへ〜

こんな感じでよろしいでしょうか？

まあ、続き…がんばってかいてくれい

第1話：自称・妖精さん（前書き）

この1話を担当したのはざしきのわらしです。

第1話：自称・妖精さん

初めまして、俺は佑川深紗斗^{すけがわみさと}。清城高等学校一年だ。

いきなりで悪いが、俺の大嫌いな物ベスト3を教えてやろう。

第三位。“意味不明なモノ”

第二位。“うるさいモノ”

そして、第一位。

俺の直感的な判断になっってしまうが。

“俺に害があるモノ”だ。

この三つは誰でも嫌いだと思う。

まあ、賑やかな方が好きとか、天然っぽいとか言う奴は残念ながら俺と友達になれない。

何。ならなくて結構だつて？

上等じゃねえか。後で泣きついて来ても仲間に入れてやんねえかなッ。

……つて、そんな話をしたいんじゃない。

つまり俺は平和主義者なんだよ。

そういうのと関わりそうな時は、直ぐに現実逃避。又は脳内削除。力付くで解決は絶対しない。だって俺、暴力反対だから。

だから俺は、“今回”も脳内削除か現実逃避しようとした。

しようとしたけど……頭が完全にフリーズしてしまったんだ。

『はぁいッ浮かない凡人さん』

“コイツ”のせいで。

そんな事を知らないチビ女は、ニコニコと片手を振って来る。ただのチビ女なら、俺も動じない。

だが、そいつは俺の人差し指程の長さしか身長が無いのだ。
しかも背中に四枚の透明な羽。

『私は妖精のサトウ。以後よろしくう』

勝手に自己紹介しだしたよコイツ。

なるほど。妖精だからこんなチビだし、羽生えてんのか。
妖精って本当にいるんだな。

お兄さんの頭はようやく稼動し始めたよ。

……。

……。

……。

って、納得するかポケエッツ！

約十分前

「ああああ……ウゼエ」

微かに赤くなり始めた帰宅路を歩きながら、俺は前方を睨み付け

る。

前方にはぎゃあぎゃああと騒ぐ、同じ高校の女子三人組だ。

今日は課題で居残りさせられたせいで、ウザイ女子達と帰宅が被ってしまった。

これだから嫌なんだ。

俺は静かな日常を好む。よってコイツらみたいな騒ぐ奴らとは、気が合わない。

まあそれは、コイツらだけに言える事じゃないけど。

「なあッ。今からみんなでカラオケ行かねえ」

「ええ、やだよ。お婆ちゃんが家で待ってるもん」

「私もお兄様が……」

別に聞くつもりは無いが、声がデカいから自然に耳に入って来ってしまう。

そつだ。騒ぎたいならカラオケにでも行け。

静寂を愛する俺の邪魔をするな。

すると、提案した女 見るからにヤンキーだな。そいつが、頬をフグのように膨らませる。

「良いじゃねえかよ。神楽も“お兄様お兄様”って言ってたら良い大人になれねえぞ」

お前が言つな。ヤンキー女。

「そつだけど……」

「アヤメも、婆ちゃんなんてほつとけ。きっと天国であたしらの熱

唱を見守ってくれるよ」

「私のお婆ちゃん生きてますけどツツ！」

友達の祖母を勝手に殺すなあツ。

「細かい事にすんなよ。でも、あたしの死神^{タチ}がお前の婆ちゃんの事言ってるんだ。“もう後は無いっシニシニ”ってね」

死神が友達って、お前誰だよツ。

てか、死神の語尾がキモい。なんだよ“シニシニ”って。笑ってるのか。

ヤバい。完全に俺の静かな日常が崩れている。

だいたい他人の話を盗み聞きして、ツツコミ入れるなんて達が悪い。

よし。遠回りになるが、裏道で帰ろう。

俺のキャラが崩れる前に、肯定してしまう前に。

俺はキツと馬鹿三人組の背中を睨み付け、手前の曲がり角に入る。

この道は街頭が少ないし、隣が雑木林だから凄く不気味だ。

カラスが目を光らせ、ガァと鳴き声を漏らす。

覚悟はしていたけど、怖いもんは怖い。

思わずゴクリと唾を呑む。

たくツ。あいつらのせいだ。

まだ腹の虫がおさまらないが、今日の所は脳内削除だけで勘弁してやる。

断じて復讐が怖い訳ではない。あくまで平和主義なだけさ。

だいたいあんな奴らの記憶が頭に入ってたんじゃ、入らない頭が余計入らないじゃないか。

俺はそういうのに振り回されるのが気に入らないだけだ。

「……クソがッ」

俺は何となくムシヤクシヤして、足元に転がってた石ころを蹴っ飛ばした。

こん、こん、こおん。

まるでウサギのように地面を跳ねながら、転がる小石。

小石は暗闇に吸い込まれ、音を立てながら雑木林に入ってしまう。別に悔やむような物でもないの、俺は舌打ちを残してその場を去ろうとした。

しかし ……。

こおん。こん。

「はあ？」

雑木林から、俺の足元に返って来る石。

石はスニーカーに当たって、再び立ち止まった。

俺の視線は、雑木林へと移る。

雑木林の奥は闇で見えないが、人の気配は全くない。

なんで戻って来たんだ。

まさかスーパードールじゃないよな。俺は思わず石を拾い上げ、地面に落とす。

まっ。当然バウンドしないな。

「……………」

じゃあ、なんで戻って来たんだ。

背筋を這い上がる悪寒という名の百足。

呆然とする俺の長髪を、春の風がさらって行く。

『もっつ。物に当たっちゃダメだよ』

突然、辺りに響いた声に俺の身体が跳ね上がった。

これは、幼い少女の声？。

振り返るが、その姿を見つける事が出来ない。

『でも“見つけた”』

俺の足元が、ぱあツと輝き出す。

否 雑木林の根元で輝く何かが、俺の足元まで照らしているんだ。

今、走り出せば逃げられる。

なのに、身体が恐怖と興味で動いてくれない。

光の根源になっているのは、蕾が異様に大きい花だった。

俺という観客を前に、蕾は次第に開いて行く。

人間にはとつてものろく感じるが、実際は植物の観察ビデオを早送りを見ているようだ。

光は大きくなり、俺の顔を真っ白に照らしていく。

花が完全に開いた時、何かが飛び出した。

リアクションする暇も無く、“そいつ”は俺の目と鼻先に現れた。

『はあいこんにちはツ浮かない凡人さん』

一瞬、虫かと思った。

透明な四枚の羽を羽ばたかせ、俺の目の前に浮いている。

だが、顔や胴体は人間だった。

栗色のおかつぱ頭を揺らしながら、片手を上げてニコニコ微笑んでいる。

『私は妖精のサトウ。以後よろしくねえ』

“妖精”？

俺の顔が引きつる中、サトウと名乗る自称・妖精がヒラヒラと宙に踊る。

分からない。けど、俺の本能は言っている。

コイツに関わっちゃいけないって。

その瞬間、俺の脳のフリーズが解けた。

『私、ずっとあなたみたいな人探して』

「あつやべ。夕方のドラマ再放送始まってよ」

俺はポンと手を叩き、回れ右をする。

俺の必殺技、現実逃避だ。

しかし、俺の足はなかなか一步を踏み込めない。

てか、ワイシャツが引つ張られてるしッッ。

『待て待て待てッ。ちょっと逃げないでよ!』

「ぐえ……く、苦しい。離せよ虫チビ」

『虫チビとは何よッ。私にとっちゃ、あんたはラ ユタの巨人兵と同類なんだから』

うわあ。まさかのジ リネタ来たー。

てか俺、現実逃避してたのに普通に話しちゃったよ。

妖精は、すっつとワイシャツから手を離すと、また俺の目の前に浮く。

『アナタは選ばれたのッ』

「だ、誰に」

『わたしたち妖精達にッ』

「何にだよ」

『一週間居なくても気付かれない凡人ベスト一位に！』

「嬉しかねえよッ」

全くもって不名誉じゃないか。

てか、何で今あつたばかりの虫にそんな事言われなきゃいけないんだよ。

俺の存在感の無さって、そんなに有名なのか。

『ええッでも物事は前向きに考えなきゃ。“コレ”はアナタが道でコケても、プールで溺れても、遠足のバスで乗って居なくても気づかれない程の存在感の無さを攻略する、千載一遇のチャンスなんだよ』

「俺の存在感馬鹿にしすぎだろう！」

でもまるつきり嘘とは言えねえけどさ。バスの話とか。それにしても、コイツは話の主語が無いから凄く怖い。何が千載一遇のチャンスなんだ。

するとサトウが出てきた花が、再び輝きだした。

さつきよりも強く、激しく、俺たちを光で包み込んでいく。

あまりのまぶしさに、俺は手で目を覆った。

「ッ」

指の隙間からサトウを睨み付ける。明らかに虚勢だったけど。でもアイツは、無常にもそれを見透かしたように俺の目の前でにっこりを笑った。

『これは、私にとっても大切なチャンスなの』

そついつサトウの目は、とても悲しげで。

『“異界の戦争”を止める為にね』

「異界の戦争つてお前　うわああッ」

今までアスファルトに立っていたはずなのに、足場がすっと消えてしまった。

どこまで続くかも分からない穴の中を、俺は光と共に落ちていく。下がどうなっているのかは分からないけど、固い所に落ちればただではすまない。

同時に覚悟するは、死。

………なんなんだよッ。なんで俺がこんな目に合うんだ。神様はなんで、俺には冷たいんだよッ。

あの生物が、俺の耳元で何か囁く。でも頭は理解しなかった。

こうして、俺の運命は狂っていく。

良い意味でも、悪い意味でも　………。

第1話：自称・妖精さん（後書き）

相方のMへ。

遅くなつてすまん《汗
続きをよろしくう

第2話：異世界へ到着（前書き）

2話は佐川芭瑠堵が執筆しました。

第2話：異世界へ到着

現実って残酷だな……。

てか、現実なのか？

俺は”必要”とされてないからってだけで……

。

「……はっ！？」

ぱつと起き上がる。

目を急に開けたせいなのか、ちかちかする。
いや、そんなことより俺は……。

「どうなってんだ？あれは夢？？」

そう思おうとしたが、明らかにさっき居た場所とは違う。
やけに茂った森の中だ。

しかもちよつと暗くて薄気味悪い。

そのくせ、俺の顔の部分だけ光が差している。

……嫌がらせか？

「（なんでこんなところに……）」

以外に冷静だった。

まだ、現実逃避が続いているのかもしれないが。

「あゝやつと起きたねえー！！」

耳元で虫がうるさ…… って?!

「ちよつきのチビ虫じゃねえーか……」

「ひどいなあー」

「……………」

バシッ

「んぎゃー……！」

見事にクリティカルヒット。

妖精となのる虫を叩き落とした。

地面に食い込んでる……………。

「どづいう事が説明してもらおうじゃねえーか？」

俺は最高の笑みでこの虫に問いた。

「いてて…だからさつきも言ったじゃない！
戦争をとめるの……！」

「意味がわかりません」

「だーかーらーはあ、まったくこれだから凡人さんは……………」

「……………今度は地面に埋まるか……？」

「アハハハ……………ジョークだって……………」

「はあ……」

まったく、コイツと話すのは疲れる。

「ん〜とりあえず、旅ね！」

旅して経験値をつんで……」

「俺はやるとも行くとも言ってるねえ……」

「もーそんな事いわないのー」

あなたしかできないんだから〜」

「一週間居なくても大丈夫」な人間なんて、わんさかいると思うぞ」

そう……ここに連れてこられたのは、そんなくだらん理由でだ。まったく、不愉快だ！！

俺は若干イライラしながらドストスと歩いている。

落ちている小枝などが、順調にバキベキメシツ！！……と折れていく音がする。

その俺を気づいたのか、妖精むしが訪ねてきた。

「まだ根に持ってるのー？」

「たりめーだー!!」

どうやったたら、気にしないでいられるか教えて欲しいものだ。
俺は更に苛立ちを覚えた。

しかし、その様子を気づいているのかいないのか……。
妖精は考えながら言った。

「ん〜でもさあ」

「何だよ？」

「……凡人さんなら、きつと困ったものに手を貸してくれる人だと
思ったの！」

「……妖精」

「あら、さとうーと呼んでちょ〜」

「虫」

「ひ、ひどいっ……っ」

おおよよ……といんばかりに泣き崩れる。
でもまあ……。。

そんな言われ方したら、ちょっとだけでもやってみるか!と思って
しまっ。

「わかった……少しぐらいなら、手を貸してやる」

「ほんと!?!?」

「ああ」

本当に……俺って馬鹿だな。

「はあ、やっぱり暇人に行って見るもんね」

俺……本当に馬鹿かもな。

「んじゃ〜とりあえず、旅の準備ね」

「へいへい……」

なんだか、さい先が不安だ。
こんな妖精むじと一緒にだなんて……。

「とりあえず、簡単に説明するとー
人間と魔物がもう、戦争勃発なわけ！

それを凡人さん…に止めてもらおうってワケなの!!」

「んな、無茶だろ?」

俺、そんな柔道が出来るとか少林寺拳法が出来るとか
剣道も何も出来ない俺にどうやって止めると?!
説得できる、会話術すらないぞ。

「大丈夫だってー凡人さんなら!」

「どっから湧いてくんだ?その根拠……」

そんな面倒なコトだったとは……。

引き受けるんじゃないかなあ……はあ。

はあ…早く家に帰って寝てえー!

「旅の支度ができたらまずは、人間の王と魔物の王に会って
二人の王様を説得ね!!」

「ますます面倒だ……」

だから、俺に説得なんて出来るわけがねーよ!!
俺に説得されて戦争止まるなら、とつくに昔に終結している気がする。

「まー…その道中、色々危険な事が起こると思っから
レベル上げを怠ると大変なことになるよ」

「ここはドラ エか何かか!！」

「まー何にせよ!

最終的にどんな方法をとるかは凡人さんにまかせるww」

「げっ……まじかよ」

「マジ」

はあ…かなり気が重くなったような……。しかし、ゲームでは経験豊富だが…実際こんなRPGまがいな事果たして俺にできるのだろうか。

ようやく、森が光を帯びた。

出口も近いだろう。

早く出たいが、そんな話を聞かされるとここから出たくない気さえるす。

「あ!あそこの村で装備しましょー」

妖精^{むし}が村を発見した。

ちよっと日差しが当たって眩しいくらいだ。

こんな森の奥に村があるとは……。

「こゝ、何か出んじゃね?？」

……俺の感が当たらないといいけど。

「ほらほらあゝ凡人さあん

早くしないと置いてっちゃうわよよよん

「

「あ、おい！ペース考えろよな!!」

危うく置いて行かれそうになる俺。

小さい癖に早っ!？

どんどん、先に行かれる。

「ああ…！これは妖精さまではありませんか…！」

村人老人Aが現れた。

てか、妖精”さま”？！
ここでは妖精って偉いのか？！

「どもー妖精のさとうーだよ」

どんな挨拶だよ。

ぜんぜん、”さま”って付けられる割には威厳というか厳格が無い。

「ちょうどいい所に…：…実はですねえ…：…」

「ふんふん」

俺をよそにひそひそと話が進んでいく。
なんだか、気分悪いーな…！

「あ、丁度よかったー
ほらそこにいる凡人さんで対応できます」

「ほおーこの少年が？」

なんだか行き成り俺に向いた。
何だっつてんだ？！

「きっと彼が解決をするから！」

「それはそれは……ありがたいのお」

「お、おい……」

だから何の話だ！
勝手に進めんじゃねえーよ。

「おい、虫……」

「交渉成立

旅の備品をタダでくれるってー」

「そりゃー良い事だが…」

何か取引したんじゃないのか？」

「オフコース！…ぐええ」

「面倒ごとだったら唯じゃおかねえ……」

俺は妖精を握りつぶそうとした。

変な液が口から漏れてる……げえ、気持ち悪っ!?

「まあ、とりあえず……ゆっくりしてってください
ささっ……こちらです」

「あ、ああ……」

言われるがままに案内される。

随分と待遇が良い。

これは何だか悪い予感がするな……。

ポイツ

妖精を投げ捨て、老人について行く。

「ああー……待ってってば、凡人さあーん」

この後、何が起るのか……予感を引きずりながら……。

第2話：異世界へ到着（後書き）

相方のMへ

ちよいと短いが…まあ、どんまいW

次話投稿よろしくー

第3話・腹決めるぜ！（前書き）

第3話はどしきのわらしが担当しました。

第3話：腹決めるぜ！

何がどういう訳で、こんな事になっているか分からねえ。

「勇者様じゃッ勇者様じゃあ！」

俺の前で桶を抱えながら、裸踊りする村人たち。
それに合わせる愉快な手拍子。

普段なら俺が一番嫌う雰囲気なのに、そこで腹を抱えて笑っている自分がいる。

けど、分かんねえんだ。

「何でコイツら、こんなに俺を歓迎してんだ……」

「そりゃあ、村にやって来た“救世主”ゆうしやさまだもんね」

空中であぐらをかきながら、“さとうー”はうんうんと頷いた。
てかお前、いつの間に居たんだよ。いや、浮いてんだよッ。

「イヤだなぁツウチはもう凡人さんの傍から・ハ・ナ・レ・ナ・イ」

「キモイ。心を読むな悪霊」

「あ、悪霊!？」

ガビーンっと、小指を立てて石像化する虫。
貴様は妖精っていうより悪霊に近いっつもの。

「あっ」

思わずハツとして、さとうーを指差す。
そっぴゃこイツ、俺に内緒で村人と取引してなかったっけ。

「おい虫ッ」

「なあにい」

「……お前、村人と何取引したんだよ」

「なんかねえ今日の夜中、およよってなってきたああアッて叫んで、
ガオオツて来てあーあッてなるから助けて欲しいんだって」

「……」

「……」

「……お前、右脳だけで生きてんだろ」

「えッヤダなあ。UNOだけで生きてたら人生つまんないよお」

だから“凡人”なんだよツと、さとうは俺の頭をベシベシ叩いて
来た。

うん。こんな馬鹿になるくらいなら、UNOでもやって一生凡人

でいた方がマシだよ。
てかそんな頭で良く村人の話が理解出来たな。取引の説明なんか、
ほぼ擬声じゃねえか。

……。

さて、困ったもんだ。

馬鹿妖精は当てにならないし、村人に聞こうにもこの浮かれ調子じ
ゃ
……。

「その話でしたら、私が致しましょう」

顔を上げれば、あの時妖精と話していた村人老人Aが俺のもとへ
近寄って来る。

まさかの読心術かと思ったけど、どうやら俺とさとうの話を見か
ねてやって来たらしい。

ナイス・じいちゃんツ！

「……わしは村長の“オウギ”と申します」

「お、俺は深紗斗だ」

この老人、村長だったのか。

まあ雰囲気的にそんな気はしてたけど。

「若者が馬鹿騒ぎしてしまって申し訳ないのお。あいつらなりに貴
方様を歓迎しているのじゃが……」

「い、いえ。それよりこの馬鹿と何を取引したんです？」

そう言いながら、俺はさとうーの羽を摘んで目の前でひらつかせた。

キーキーと虫女が叫ぶが、完全シカト。

すると村長は言いずらそうに眉間にシワを寄せ、静かに視線を落とした。

「実は今晚、“魔物”が村にやってくるのです」

「へえ……って、ええええ！」

俺の目が落ちるんじゃないのかってくらい見開く。

だってそうだろう。外はもう日が暮れてるし、まさに今じゃねえかッ。

「目的は、村の娘をさらう事にして」

「いいい生け贄ッ？」

「娘を差し出さなければ、村を焼き払うと……」

「ヤバいだろッ宴会してる場合じゃねって……」

「だから、貴方様に助けて頂きたいのです……」

その一言に、俺の頭は真っ白になる。

助ける？

助けるって、その魔物から？

無理無理無理無理無理無理無理無理ッ。

俺、暴力反対だもん。
仮に戦っても絶対負けるって。
完全な拒否反応を示す俺を無視して、老人は続ける。

「無理を承知でお願いしております。しかし、無理に魔物を倒さなくとも良いのです。ただ……」

「ただ？」

「生け贄の娘の身代わり”なって頂きたいのです”

……。

……。

身代わり？

今、このじいちゃん“身代わり”って言わなかったか？

聞き間違いじゃなくて？

「衣装の事ならご安心してください。勇者様の最期に相応しい死装束きもをご用意致しますので……」

「えっ衣装とか別にどうでも良いけど。てか俺、死ぬ前提で備品とかの取引してる？」

「貴方様のような貧弱なお身体なら女装しても絶対にバレませんし……」

「うわぁ完全にシカトだし、つーか貧弱っていくら心の広いお兄さんでも軽く傷付くよ？」

「備品の件でしたらご安心下さい。棺の中に入れておくので」

「じゃあ安心だな …… って、納得出来るかポケエッツ！」

ずぶしいツツ。

俺の凡人パンチが、老人の貧弱顎にミラクルヒットする。

空中でイナバウアーしながら地面に着地する村長。フィギュアスケートなら金メダルあげちゃうよ。

「うわあうわあツ凡人さんが老人虐待してるう」

「……平和主義のキャラが自滅したくなるような取引かました虫に言われたくないな」

耳元でブンブンと飛び回る妖精に、俺は舌打ちする。

面倒どころか、危険過ぎる取引じゃねえか。

こっちは命がけなのに、その報酬が備品だなんて少し安すぎる。全く面倒くせえ事になったな……。俺は一本縛り長髪頭を、ガシガシと掻き乱す。

「おい虫ッ」

「いい加減“虫”って呼ばないでよお」

「……旅の備品ってここじゃなきやダメなのか」

「ええッ備品いらないのお！」

信じられないツと言わんばかりに食いつく虫。

別に要らないって訳じゃない。ただ、この村の諸事情で命をかけたくないだけだ。

備品ぐらいなら他の村でも何とかなるだろう。

しかし、さとうなりに何か考えたのか。右手で拳を作り、顔を緊張感で張り詰めている。

「でも旅の備品がないっていうのは、ハンバーガーのくせにケチャップとレタスしか無いのと同じなんだよッ」

「考えた説得がそれかよッ」

「てか、ケチャップとレタスしかないならただのサラダじゃんッ！」

「知るかッ」

ガビーンっと、勝手にショックを受けているさとう。

てか、例えがおかしいだろ。なんでレタスとケチャップなんだよ。パンかハンバーグ、どっちか残せよ。

「あ。でもそこにマヨネーズ足すとオーロラソースになるから楽しさ二倍だねッ」

「……んな裏ワザメニュー勝手にやってろ」

なんで旅の備品の話から、こんなサラダの話に発展してんだよ。

コイツと話していると、頭がこんがらがって来る。

早いとこ結論を言おう。俺はよっこらと立ち上がり、障子に手をかけた。

「とにかくッ！」

まだ一人でぶつぶつと呟く虫に、まだ宴会騒ぎする村人たちに、声を張り上げる。

「虫の言った取引は無効だ。あんたらの問題なんだから、よそ者に頼るな。俺はもう……」

シーン……。

静まり返る宴会場。

何やら殺気を感じた俺は、慌てて振り返る。

さっきの温かい雰囲気はどこへやら。

村人たちがゆらりと立ち上がり、ツボやら灰皿片手に俺を睨みつけてるうつつ！

「あんだだけご馳走食つといて」

「取引は無効って話はねえだろ……」

「あんちゃん」

「村人ナメてると」

「死ぬよ？」

あわわわッ。

一言いう度に、近付いて来る村人。

俺は下がろうにも下がれず、障子にへばりつくしかない。

そつだッこつという時こそ虫に助けを　　ってアイツ腹抱えて笑ってるし！

「こちとら窮地なんだよツてかお前が蒔いた種だろうが！
ちくしょう。こんな時ほど、笑顔で平和解決しかない。」

「み、皆さん落ち着いてツ。まままず、鈍器を離しま」

「取引を実行するのか」

「ここで殺られるのか」

「今、腹あ決める」

「ひいひいッ！」

「うわあッ。」

「聞く耳すら持ってねえ。」

「さあさあさあさあ」

ただでさえ距離が無いのに、村人は遠慮なく詰め寄って来る。

「さあさあさあさあさあさあさあ」

もう顔が触れそうなほど近くなる。

「ヤバい。死ぬッ。」

「さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあッ！」

「ももももも無理ッ……！」

「わ、分かったよッやるから！ 全力で“身代わり”になりますか

「らあッ」

今まで味わった事の無い殺気に、俺は負けてしまった。村人たちはその一言でケロッと陽気なテンションに戻って、歓声をあげながら宴会を再開しだす。

命の危機から脱出した俺は、情けない事に腰を抜かしていた。

「な、なんなんだよ……」

ぶつちやけ魔物より村人の方が怖いんじゃないのか。

ため息をつきながら障子に寄りかかると、そのまま縁側へと滑り落ちる。

「ッ」

まっ外れたんだな。体重なんてかけたから。

頭では分かっているつもりでも半でんぐり返り状態で、石に頭をぶつける俺ってなんだろ。

もしかして虫と同類の馬鹿？

「違うよ」

逆さまに見える虫が、ケラケラ笑う。

「凡人さん」は“凡人さん”だもの」

誉められてんだか、ナメられてんだか分かんねえ。

俺はフンツと鼻息を荒げる。

「……そうだな」

どうやら俺は神様に見捨てられたらしい。
神様に見捨てられた凡人ってどんだけよ。

でも、こうなったらやっつてやるしかねえな。

俺だって男だ。やるときは腹を決める。

魔物がなんだッ凡人の底力見せてやる！

「腕の一本や二本持っていられるかもしんないけどガンバレえ」

……。

……。

前言撤回して良いっすか。

第3話：腹決めるぜ！（後書き）

オーロラソースって……美味しいですよね《オイ

小さい頃、良く食べてましたV（^・^）V

く相方へく

こんな感じだけどよろしく頼むぜッ

第4話：律儀で な魔物（前書き）

第4話は佐川芭瑠堵が執筆しました

第4話：律儀で な魔物

「はあ……俺、何やってんだろ」

もう泣きたい気分だ。
それもこれも……。

「凡人さあん、がんばれ」

「誰のせいだと思ってるんだよー!!」

ググググッ……。

こんな効果音を出しながら妖精を絞めていく。

「うげええああ……や、やめ……死ぬう」

「いつそ、死んで見るかあ？」

「いえ……死にたくあ……り……ま……ぜん……」

「……はあ、今更だよな」

ポイツ

諦めて、妖精を離してやる。
息が吸えてやっと落ち着いた。

「ふう……助かった！」

まったく、この虫と来たら……。
コイツと一緒にもう居たくないぜ。

こうして一人（と、一匹）村に取り残されてるもの……。
村人たちに脅しつけられて。
無抵抗な俺は……承諾するしかなくて。

ここに人質として存在している訳で……。

「そ、それにしても……女装案外似合うじゃない」

「てめえ……気にしてんだぞー!!」

「こうして、女装までして……。」

「あ、あくそつっ!!」

「なんで俺が女装までして人質にならんといけないんじゃない!!」

「まーまー」

「一応、勇者ってポジションだし??」

「好きでやってないのに……」

「てか、こんな女装する勇者なんて聞いたことねーよ!!」

「俺はちょーヒラヒラした……」

「しかもピンクの民族衣装……。」

「女の子がこういう格好したら可愛いんだろうケド。」

俺が着ても、誰も喜ばん！！

「勇者って最初はそういうもんだよ」

「たま、握りつぶされたいかあ？」

「……めっそうもございません」

こうしていても、らちがあかない。

そろそろ、真面目な話でもしようと思った。

一応……命が掛かった戦争を止めるという俺の使命。

ゲームだったら気軽に「まかせろ！！」と言えるが……

いくら、異世界だからって本当に存在する命だ。

「なあ？虫」

「そろそろ虫って呼ぶのやめてっ凡人さん！」

「てめえもその”凡人さん”をやめやがれ」

「えええー……」

なんなんだよ！この虫があ！！

人がせつかく、真剣に話そうとしてるっていつのに……！！

「俺はどうやってその魔物とやらと戦えばいいんだ？」

「そりゃ、この剣で……」

妖精は不思議な力で軽く剣を浮かせて見せた。

いかにも、勇者が持ちそうな聖剣せいけんと言ったところだ。

磨き上げられた鋭い剣。

鞘も宝石という豪華な宝石で、宝飾されている。

けれど……。

「……チツ、さっき持とうとしたけど持ち上がらん」

「貧弱ねえー」

「何だとしてめえ……!!」

また、俺が気にしていることを言うので

こぶしを震い翳かざしたら妖精は。

「お、おかしいなあ…あはははは」

「（笑ってごまかしやがる……）」

どうやら、俺のこぶしが怖いと分かっただらしいな……。

……そう！

”勇者の剣”とやつをさとうーから貰って持とうとしたが
一向にもちあがらん。

「いくら凡人さんでも……持てそうだけどなあ」

「持てんもんは持てん」

「じゃ、これにしようか」

えいえいっ

「なんじゃそりゃ……」

ティンカー　　ルの粉を振り撒いて
出てきたのは……。

「……………」

「ほら この神法で…」

「俺にこんな……………」

魔法少女が持っていていそうなステッキでかああああああああ！?!?!?!?!?

「ふざけんな！！！」

「えー…これくらいしかないしい」

「可愛い子ぶってんじゃねえ！！」

まったくもってふざけすぎだ。

誰が魔法ステッキまがいのヤツを使えって言うんだ！

俺は男だぞ！！

……今は女装しているが。

これ以上、俺に恥を晒させるなってんだ……。

「でも、背に腹はかえられないでしょ？凡人さん！

もうすぐ魔物が来ちゃうのよ！！」

「うっ……」

まあ、そうなのである。

まもなく魔物が来るころ……。

「あ、まだ五分前だあ。遅れたと思った!!」

本当に魔物、時間に律儀だったあああああ?!

「マジかよ?!」

魔物が律儀とか。

てか、悪者じゃねえのかよ……。

ちよー良いヤツっぽいじゃん!!

……良く見ると、ちよつと犬っぽくて可愛……良くない!!

「ね

だから、言ったでしょ？」

「ね……じゃねえよ!!」

まあ、そうだとしても後残り5分

「くそっ、これでやるしかないのか……っ」

このふざけたステッキで……。

いかにも、魔法少女サーちゃんとかクリーミーマミーちゃんとかが
使ってそうな……このステッキで。

「凡人さん、がんば」

「可愛いマネジみたいに応援すなー!!」

けど、どつやってこれを……。

「リリカル マジ狩る

〜)になーれっ って唱えればいいんだよ」

「……出来るかー!!」

しかも変換、間違ってないか!?

しかし……。

「ちっ……恥ずかしがってる場合じゃねえな!!」

ここは恥を忍んで……。

「おおおおおお！時間になった！……！」

どうやら、時間になったらしい。

「お前が村の娘かあああ？！」

「ああ、そつだよ……！」

「おおおお！なかなか可愛い娘じゃねえええかあああ！……！」

「（ひいひいひいひい）

気色ワリイ………」

語尾にハートでも付けてしまいそうな言い方だ。
軽く、鳥肌が立ってしまう。

「さあああ！大人しく、オラとくるべやあああああ

「はっ！……そう、大人しく連れて行かれるか！……！」

「あああああ、強気な娘ツ子もなかなかだべえええええ」

「ええええ！？マジかよ……」

なんつー趣味だ……！！

「意地でもてめーになんか連れて行かれるわけにはいかねえ……！！
……くっ！リリカル マジ狩る 魔物よ！小さくになーれVV」

がああああああああ！！！！

言っちゃまった！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？

トゥルルルルルルルーン

………なんだか、メルヘン的な音が鳴ったんだけど！！！？？

「あああああ！？？小さくなっちゃったべえ………」

魔物はみるみるうちに小さくなっていった。

「本当に使えた……」

恥ずかったけど……これでなんとか緊張してたのか、どっと汗が噴出す。安心してすぎて、腰が抜けそうになる。

魔物は大型犬くらいの大きさになった。

なんだか、ものっそ可愛くなったな……。

「……おい、魔物」

「なんだべえ？娘ツ子」

「触っていいか……？」

犬好きの血が騒いで、わしゃわしゃしたくなる。

「え、別にいいけどんも……??？」

「そうか……」

実は俺は可愛いものに惹かれる……。

わっしやわっしやと豪快に撫でる。

ああ、本当に犬だ、犬！

「ああ……きもちいだべえ」

「マジ、犬みたいだな……」

さわさわ……

ふさふさしてるし……。

「なあ？魔物……」

「オラにはケルベルンという名があんだあ！」

「（名前、可愛くないか……！？）」

「そか、ケルベルン……この村を襲うのとかやめろよ？な？？」

俺は優しく言うと……ケルベルンは。

「じゃあーおめえさんがオラにチュウしてくれたら考える!..」

「なつつ!?!?!?」

なんつつた!?!?!?

正気かあああああ!?!?!?!?!?!?

「フフフ…凡人さん!

してあげたらああん?」

状況が落ち着いたのを見計らい妖精が出てきた。
しかもふざけた事まで言い出すし……!!

「するか!?!」

あ、あのなあ?俺は男なんだぞ?」

「そうなのかあ??」

でも、魔物の間に性別は関係ないべえ」

また、ハートが飛んでくる。

しかも男の俺に……。

「げつつ……なんという……」

「なあ〜いいだろお〜?？」

「ちょー!調子にのんなー!……!」

ドゴッ
ッ

「痛い……そんなおめえさんも良いだべVV」

「おまつMか!??」

「冗談じゃないつつ……」。

「……と言う訳で、魔物はもう大丈夫だ」

「ああ……ありがたや」

勇者様、ありがとうございます」

「「「ありがとう、勇者様！」「」」

「ま、まあー……これくらい、大した事ないっ」

「ああ、さすが勇者様」

「慣れておられるー！」

まあ……魔物を倒したわけじゃないけど。

「姐さんvv」

「お前……少しは離れろ……」

さつきから、犬が甘えたように擦り寄ってきたり
甘えに後ろからアタックされる。

「一生、姐さんについてくべえ!!」

「はぁ……」

「良かったねえ??」

「うっせ!!」

何だかんだで、解決したものの。
新たに魔物の”ケルベルン”を仲間に加えた。
まあ、何かと役に立てば良いが……。

「おい…ケル」

「なんだべえ？姐さんv」

「その”姐さん”やめろ……」

俺は男だ！それに深紗斗って名前もある!!」

「それじゃ、深紗斗って呼んでええでか?!」

「まあ……姐さんよりはマシだな」

「やったべえ〜深紗斗大好きだああVV」

「ぐあっ!?!ちよ、やめろー飛びかかんなっ」

なんだか、大きな犬を抱えてしまった。

とりあえず、村人たちから装備品を貰い

なんとか旅に出たはいいもの

こんな仲間?を抱えて……果たして俺は、使命??を果たせるのか。

続く。

第4話・律儀で な魔物（後書き）

なんだか、オリジナル満載になりましたw
相方よ！がんばって続きをよろしく

第5話・深紗斗はツライよ(前書き)

第5話はどしきのわらしが執筆しました。

第5話：深紗斗はツライよ

知っている人も知らない人もこんにちは。

俺は理不尽にも異界に飛ばされた佑川深紗斗です。

謎の妖精（てかただの馬鹿）に拉致られ、滅茶苦茶なツッコミ役を任されるわ、村人に脅されて女装する羽目になるわ、魔女っ子の真似事はさせられるわ、Mな魔物には好かれるわ散々な目にあっています。

可哀想な俺。静かな日常を愛する俺にとってここは地獄です。

ああ夕方ドラマの再放送どうなったんかなあ。母ちゃん、父ちゃん、俺はこんな地獄の中でも『リリカルマジ狩る』なんて唱えつつ生きてるよ。

だから俺の事は心配せず、そちらの世界で温かく見守っておくれ。

「グラマラス妖精アアアアツクツツ！」

ふいごおおッ。

突如、俺の頭蓋に走る震度七の揺れと衝撃。

うん。言うまでもないな。あの馬鹿妖精が俺の頭を殴りやがったんだ。

しかも“石”で。

「うふふふっ参ったか極悪ぼんやり凡人・ツカエーナイ」

「ははははつぶっ殺すぞクソ妖精があああッ！」

「ぎにゃあああああああ」

世の中にはやっちゃんいけない事があるのだよ。

「つかその“極悪ぼんやり凡人・ツカエーナイ”に助けを求めてきたのは貴様だろう！」

その前にツカエーナイって何だよッ。

俺はさとうーをリンゴの砕くような握力で鷲掴み、そのまま妖精汁100%のトマトジュースを作ろうとする。

しかし足元でふわりと何かがこすれ、俺の気は妖精から足元へと移った。

「まんずまんず。妖精も悪気があった訳じゃないべえ、ここはおらの顔に免じて許してくれんかのぉ」

大型犬・ケルベルン　ごめん、間違えた。大型魔物・ケルベルンは俺の足にすりより、うるうる俺を見上げてくる。コイツは俺の神法（あの魔女ツ子魔法）で今は大型犬みたいになっているが、実は大型トラックに匹敵するぐらい馬鹿でかい。まあ、今じゃ仲間だけど……。

「てか、悪気があったから石で殴ったんだろぅが」

打ち所悪かったら死んでたぞ。

「この妖精なりに心配してたんだべえ」

「何をだよ」

「深紗斗が急に空を見上げて立ち止まったからだべよ」

……。

ああ、冒頭の“知っている人も知らない人も……”って話してた時ね。

だって誰だって悲しくもなるだろうが、色んな意味だよ。特に魔女ツ子とか魔女ツ子とか魔女ツ子とか……。

「し、死ぬう……………」

手元から微かに聞こえるか細い声。

急にガクリと力の抜けたさとうを見れば、口から泡を吹きながら気絶している。

……………。

“心配”ねえ。

コイツが俺の事を気にしてるようには見えないけどな。

何を考えてるのか分からねえっていうか　てか、コイツの思考をまともに考えるだけ無駄だな。

俺はケルの背中にポイツと妖精を投げる。

「深紗斗どうかしたか」

「別に…………さとうーと関わるならコレぐらいでキレても仕方ないなつてさ。ほら、さっさと次の村へ行くぞ」

「ままま待つべや深紗斗ッ」

「うおッズボンを噛むな！」

いきなり顔色を変え、俺のズボンに噛み付くケル。
てかやめる。俺、このズボンしかもってないんだからッ。

「歩く前に一つお願いがあるべえッ」

異様に目を輝かせ、ヘッヘッと舌をだしながら呼吸するケルに俺は少し身構える。

「な、何だよ」

「おら、深紗斗におにぎりを……」

「おにぎり？」

ああ。なんだ腹が減ってたのか。

魔物のケルだって人間同様に腹が減るのは当たり前だ。

俺は快く肩掛けバック（これも村人からの支給品）から、村人特製の梅おにぎりを取り出す。

「ほら。食べよ」

「違うべえッ」

「はあ？」

だっておにぎりだろ。おにぎりは食う以外に使い道はないだろうが。

「そのおにぎりをおらの顔にぶつけて『この駄目犬がッ』って言うて欲しいべえッ！」

「意味わかんねえよッ!」

もうヤダこのドM大型犬。

てな訳で俺たち(一人と二匹?)は、次の村を目指して森を永遠と歩いていくわけだ。

森は微かに日が差し、たまに風が木々と擦れ合って、サワサワと音を立てる。

俺にはそれがなんとも言えない癒しの音楽に聞こえる。

都会には不気味な竹林はあるけど、こういうのどかな森は早々無
いからな。

俺は大きく腕を上げ、深呼吸した。

「すうはああ。静かって素晴らしいッ」

ドカツバキツバタツ。

「すうはああ。新たに道を開拓するって素晴らしいッ」

「んだんだ」

そうだよ。こいつらがいたんじゃ俺に“静か”の文字はやって来
ないのは分かってる。

嫌な予感がして振り向けば　って、あのクレイジーコンビが森
の木々を乱伐してるじゃねえかよ!

「貴様ら何森林を破壊してんじゃあッ」

「だって木を避けて歩くと面倒くさいんだもん。ねえケル？」

「進路革命だべえッ」

「進路革命せんで良いッ！」

するとさとうーは、革命を理解していないと言わんばかりに頬を膨らませる。

「ええッ。でもこの切り開いた道が後で有名になるかもしれないよ

お

「あっそう。別にどうでも良いし」

興味ねえよ。てかこの無駄に切り開いた街道が有名になるまでに俺は帰るツつつの。

なのにコイツ、勝手に街道を作った挙げ句の果てに名前まで付けやがった。

「名づけて“一週間無くても誰も困らない街道”」

んな街道誰が通るかッッ！

こんにやる。そんな街道の為に狩られた木や通る奴の気持ちを考えやがれ。

惨めだろっが、色んな意味だよ。

てか妖精ならもう少し緑を大切にしろ……。

「てゆうーか凡人さん」

「なんだよ」

「なんかして遊ぼう」

「ガキか貴様はッ」

うわあ、まさかの無茶ぶりキターッ。

てか俺はお前と遊ぶ為に拉致られたんじゃないやねえんだが。

でもそんな事を言ったら、また森林伐採に走りそうだな。

面倒くさいが、ここは付き合ってやるか……。

「
始めに言っておくが鬼ごっことか無駄に体力使うのは嫌だか
らな」

「じゃあ昔話してあげる」

いや、頼んでいません。

「むかあしむかし……」

うわあ勝手に始めやがったッ。

ここからさとうー視点の昔話に入ります。

むかあしむかし、あるところに“ぼんやり凡人・ツカエーナイ”
がいました。

まだそのネタ引きずるのかッ

ツカエーナイはその名の通り、とにかく使えません。
例えるならば奴に新聞を取りに行かせるより、犬に新聞を取らせ
に行った方が早いくらい。

本当に使えねえな……。

ある日、それを見かねた母親はツカエーナイに“とある技”を教
えました。

ヤッタねツカエーナイ！

今日から“ツカエール”に改名じゃんッ。

おッ。

てか、母親いたのかよ……。

ズバリ『腹話術』です。

うわぁ使えねえ。

母親は気付きました。

“ツカエーナイ”が“ツカエール”になる為には腹話術だけでは足りないトッ。

おお気付いたか。

っーか腹話術もいらないな。

パペットをまだ一体も買っていないかったです。

貴様は腹話術の何を教えたんだッ！

これを良い機会だと思った母親は、ツカエーナイにおにぎりを持たせてパペットを買いに行かせました。

目指すは隣町の雑貨屋さん。

歩いて五分しかかからない雑貨屋さんへ、さぁレッツゴー。

もう勝手に行っておくれ……。

歩いて三十二秒後、ツカエーナイは疲れ果てしまい、少し休憩する事にしました。

早ッ

ツカエーナイはおにぎりを食べようと、笹の包みから取り出しました。しかしその瞬間、おにぎりが落ちてしまったではありませんか。

おにぎりがアスファルトを転がって行きます。

ネチヨネチヨとお、ネチヨネチヨとお。

音がリアル過ぎるだろうッ

とうとうおにぎりは下水道へボツチャン。
ツカエーナイは絶望しました。

『そつえば今週のお昼ご飯、ずっとおにぎりだったよな』と……。

いや、今関係ねえよッ。

すると、どうでしょう。

下水道の中から女神が出てくるではありませんかッ。
彼女はオニギリ両手に、微笑みかけます。
ちよっとへドロ臭いのはご愛嬌です。

『アナタが落としたオニギリはこの梅干し？ それともツナマヨ？』

もうお兄さんツッコミ疲れたよ……。

ツカエーナイは言います。

『ワタシ、アナタの言葉理解デキマセーン』

女神の言語文化とツカエーナイ家の言語文化は、ちよと違ったみたいですよ。

使えねええええッ！

何だよこの話。

聞いてる方がすんげえ疲れたんだけど。

「てな訳で、ツカエーナイは下水道の女神にも見捨てられ、パペツトを買って来れなくて母親にも見捨てられ、皮肉れて“極悪ぼんやり凡人・ツカエーナイ”になったんだよ」

えっへんツと胸を張るさとう！。
いや、意味分かんねえから。

てかこの話をした意味あるのか。ただ無駄に時間使っただけじゃね？

「だから凡人さんも、ツカエーナイみたいにならないように気を付けてね」

「誰がなるかッ」

バカにすんなッ。俺は鬼顔で威嚇し、フンツと鼻息を荒げながら
ずんずん歩いて行く。

たくツ。付き合ってられるかよ。

つーか疲れた。

早いトコ次の村に行っ、ゆっくり休 ……。

「あッ凡人さん！」

「みみみ深紗斗お下を見るだベッ」

んあ？

下だあ？

俺は首を傾げながらも下を見た。

さっきまで雑草や枝が敷き詰まっていた地面はなく、真っ暗な空間の上に立っている俺。

“直径二・三メートルの穴”と分かるまでにはそう時間もかからなかった。

でも今、俺は穴の上に立ってるのよ。

「……………」

「浮ける訳ないよね。」

「どっかの馬鹿みたいにさ。」

「うわあああああ……ッ！」

「当然の如く、穴の中へ落ちる俺。」

「てか穴が深すぎて、なかなか底に着かねえんだけどお！」

「いや、底に着いたとしてもこの高さは確実に死ぬ。全身強打で即死するううッ。」

「みみみ深紗斗おッ今助けるべさああ」

「微かに聞こえるケルの声。」

「ありがとうッ。やっぱDMで馬鹿なお前でも危機を察してくれるんだな。」

「ケルう別に助けなくて大丈夫だよおお」

「微かに笑いを含むさとうーの声。」

「何が大丈夫なんだよ馬鹿虫！」

「ケルの思いやりを無効化にするんじゃないえッッ。」

「きつと下水道の女神が助けてくれるよおお、おにぎり両手にいい」

「！」

「ここは下水道じゃねえよ！」

こんな窮地に大声でツツコむ俺もどうかしてる。

「そうだったッ」

そろそろ良い加減にしゃがれムシイい！

「仮に出てきてもおにぎりどっち選ぼうかなあ……あッ『本物はチヨコボール入りおにぎりです』なんてどう？」

んな事、今悩むんじゃねえええええ！

第5話・深紗斗はツライよ（後書き）

更新遅れて申し訳ありません。

それにしても……無駄にツカエーナイの話で文字数が膨らんでしま
った（ノ 丁）
まっいつか

さあさあ穴に落ちた深紗斗を待ち受ける運命とは ？

相方よ

遅くなつてすまん が、続きよろしくだぜ《ニタリ

第6話：地底 世界（前書き）

担当は佐川芭瑠堵が担当です^^

今回は長めです。

心して読んでください

第6話・地底 世界

「いつてえー…なんなんだよお、まったく!」

あんな大きな穴に気づかないで
穴に落っこちるなんて俺って馬鹿だろ……。

「そうなのよお、やっと、気づいたあ?
凡人ツカエーナイ」

「黙れ、クソ妖精…潰されたいか?!」

「滅相も無いでアリマスツツ!!!」

「たくよ……って」

いちいち、俺の心内を読むなつての。
しかし…よく見上げると、結構落ちたな。
……の割には、あんまり尻^{ケツ}がいたくねーな。

「それはツカエーナが…」

「あゝア!？」

「ふーふう」

「口笛でごまかすな……!!」

しかも、何気に吹けてねえしな……。

「……ごほん。」

とりあえずねー下敷きになってるよ」

「はあ？何が……」

「ケルちゃんが」

「一瞬言っている意味がわからなかったが……。
でも俺の尻ケツの下は妙に生暖かい。。
恐る恐る確認すると……。」

「け、ケル!？」

「わっわりい……軽く気づかなかった!!」

悪いと思って、降りてやろうとした。
いくら俺がそんなに重くないって言っても……。

あの上から勢い良く落ちたのだ。
痛いに決まってる。

「い、良いだべさあー……」
深紗斗の尻にしかれるなんて……くふふ」

笑みが恐ろしくDMの顔だ。

「お、おいおい……とりあえず降りるぜ……」

「遠慮は無用だべえ」

「今は遠慮サセテエー……」

悪いが今のはものすつごく気色悪いつていつか……。
ぶっちゃけキモイ。

「さて、この後どうするかだな……」

上を見上げて見て……。

絶対に頑張ったって登りきれぬ深さじゃない。
落ちてきた出入り口が、ここから見るとボールくらいに見える。
……と言つのは言いすぎだけど、それくらい遠くのほうに見える。

「しかし……よく俺の体重に乗っかられて無事だよな……ケル」

「オラの種族は特別頑丈だべえ」

深紗斗くらいの重さならいつでも受け止めるべー！

「……ああ、さいですか」

心配して損した気分だ。

「ここはアレあるよ」

進んでみるべしべし……！

「考えなしにいうなし……」

ズシコシ

「いったあーい」

いつものようにどしどし叩く。

……「考えなしに……」って

そうは言ったものの……進むしか手が無いわけで。

ん？でも、まてよ？？

「この魔法のステッキで……はぁー」

良い考えを思いついたのだが……

また、あのふざけた魔法を唱えないといけなくなると……。なるべくなら使いたくないのが……俺の心情だな。

「でもねえ、凡人さぁん」

「なんだよ……てか、いい加減に名前で呼べ!!」

「じゃ、深紗斗おー」

そのステッキはねー

その場所場所にあったエネルギーをお

そのミラクル ステッキに注入しないとツカエーナイ」

「うわぁー……マジで使えない。。」

てか、そのネーミングセンスどうにかしろよ……」

そんなメンドクサイ物だったとは……。
ただでさえ、あんなこっ恥ずかしい呪文を唱えないと使えないって言うのに。。。

「あの時渡した時のエネルギーは太陽！」

すなわち、あの町は太陽を司っているって訳

だからこのさとうーが昼間にパワーを貯めてたのよん
偉いでしょ???w」

「…はいはい。エライデスネー」

「カタコトとか、寝める気ないの?!」

「アリマセンコトヨ……」

まあ、押し付けがましい寝めてほしいとか。

ぶつちやけ、ウザイけどどんまいだな。。

この妖精は…たくつ。

「じゃあ、ここを抜けるには…とりあえず進むしかないのか……
しょうがない。これしかないなら、行くしかないか！」

「あ、でもオラなら登れ……フゴゴッ」

「ん？何か言ったか？？」

「ケルちゃんは何も言ってないわ！」

「キモイって、今さとうーの言い方はあ……たくっ行くぞー！」

「い、言わなくていいだべかあー？」

オラならこれくらいの絶壁登れるって？？」

「いいのよー」

この地界で経験稼ぎするのも一興だわ」

「そ、そうだべか……」

「ちっ……奥のほうだと光が届かないのかよ」

「そうみたいね」

「どうにかしろ！妖精^{むし}！！」

「どうにもへんよ」

「てめーの不思議な粉（ティン　ーベル的な）を使えば光るんじやね？」

「あー…でも、使うのイヤ」

「じんのぉ………！！」

「まあまあ、落ち着くだべえー深紗斗」

…まあ、何気に均衡が取れているパーティーだ。

………てっ！そんなことこの際どうでも良い！！

「くっそー……ぜんぜん見え……わっ!？」

「キヤツ……?!」

ドンッ

……えっ?人……??

こんな所で人にぶつかるとかなんて思っても見なかった。
とりあえず、声からして女の人だ……。

これで、男だったら、俺……凹んじゃう。

「だ、大丈夫ですか……??」

「え、ええ……大丈夫です」

よ、良く聞くと可愛い声だな……きっと可愛いに違いない。

……なんて妄想を膨らませてみたりする。

しよっ、しよっがないだろ!

俺も男なんだから……。

「あら?もしかして地上の方ですか??」

「あ、ああ……そうですね」

「大丈夫ですかあ？」

地上の方だと、この暗さでも見えないと聞きますが……」

「え、じゃあ君は……？」

地上の人間じゃない……ってことか??

「あ、申し遅れました……。」

私はドイツ・チイと申します。

この地界に住んでいる、地底人です」

ち、地底人だつて?!

この世界は何でもありなのか……。

いや……妖精や魔物が居る時点で、もう何でもありな気がする。

……チイの姿は見えないが……どんな容姿なのだろうか?

魔物と同じような感じなのかな……声聞く限りでは可愛い感じだけ……。

「まったくく〜凡人さん!

自己紹介くらい早くしなさいよ」

「だまれ、妖精」

「ごめんねこの子、ちょっと乱暴でやんちゃで……」

てめーは俺の母親か！

「私は妖精のさとうー

こっちは凡人さん

んで、こっちのワンコが蹴るベルン」

おいおい、なんかまた違くないか……！？
蹴るって……おーい。

「あきらか、俺は名前じゃないし

ケルが蹴るゝになってるし……！」

「細かいこと、気にしたら負けなのよー凡人ツカエーナイ」

「てめっ……！……！」

調子こきやがって……！

「ふふふっ………」

「えっ？」

「ん？」

急にチイが笑い出す。

な、何か可笑しかったか俺達……??

「あ、ごめんなさい…ふふっ

あんまりにも仲がよろしいから」

「はあ？」

「だってさ よかったねー凡人さん！」

「よかねーよ！！」

「おいおい、チイ…さんだっけか」

「呼び捨てで構いませんよ？」

「じゃ、チイ……こいつと俺見て

どこが仲が良いって??？」

不思議でたまらん。

「だって…凡人さんの表情、生き生きしているんだもの
とっつても楽しそう！」

「そ、そうか…??？」

……凡人さんで名前が定着しているのは置いておいて。
そんなに生き生きしているか？
微妙な心境だ。

てか、見えてんだな……地底人さんには……。

「あ、ちなみに凡人じゃないから……名前」

「そ、そうなんですかつ!？」

「悪いな……こんの妖精のせいで……」

「何でもかんでも人のせいにしちゃだめ」

「てめーのせいに他ならんだろうが!！」

こいつと居ると疲れる。。

「俺の名前は、佑川深紗斗だから……よろしく!」

暗闇に近い中で、相手の声を頼りに手を伸ばす。
すると、冷たい小さな手が握り返してきた。
……うん、普通の手だ。

失礼な話だが、そう思ってしまう俺がいる。

「では、少々お待ちください。
今、光をお持ちしますので」

そう言つて、トテトテと足音が遠ざかる。

「よかつたー…地底にも明かりがあるんだな！」

「あたりまえでしょーじょ・う・し・き」

「……………」

「……」

深紗斗は”無言の威圧”を覚えた！！
ちやららららん

「へんな音流すな！！」

「こちらが、地界の町です」

「ふえー結構、現代的なんだなあ」

チイはすぐに光という

なんだか、不思議な火みたいなのを持ってきてくれた。

そのあと、案内を買って出てくれたので、任せた。

前に訪れた町……というか村が。

あれの比じゃない。

レベルアップした感じだ。

俺の現実世界とちょっと似てる。

中世の家並みってトコロか??

洋風作りの建物で、歴史を感じさせる古さだ。

チイによるとみな、土で出来ている建物らしい。

「すごいだべえー」

「まあまあよね

……ぐえ」

調子こいた妖精をちょっと握りつぶしてやった。
どんだけ上目線なんだよ。

それにしても……チイが持ってきた明かりが仄かなもので
少しの光で、辺り半径3、4メートルが見えるくらいだ。
何だろう？ろうそく位の明るさって言うのかな。

地底人ってこんな暗闇の中
明かりが無くても見えるんだから、すごいよねーって感心する。

「そういえば、その明かりって”火”じゃないよな？」

「ちょっと違いますね

確かに似ているけれど…何ていったら良いでしょうか……」

チイは少し考え込む。

「その説明をする前に、このエネルギーについて話したほうが
いいわね」

そう思い立ったチィここ地界について話し始めた。

……そういえば、妖精さとうーも言っていたな。

ミラクル ステッキの力を貯めるのに、それが必要だとか？

「ちょっと昔話が入りますけど……ちょっと長くお話しますね」

それは昔。

地界にまだ人という種族が住んでいなかったころ。

地上では、山の噴火でマグマの動きが活発になっていた……。

人々は混乱し、逃げ惑い……ある村の民は地下に逃げ込んだのが地底人の始まりだったという。

そこで人々は…マグマを起こしている原因に出会った。

これを何とかして、生活するのに役に立てないか？

そう思ったそうなの。

地界に逃げ込んだ人々は生活を豊かにするため日々努力精進した。

研究の末……とうとう、マグマをエネルギーに変える事に成功した。

光とも使えるが、もう住み慣れてしまったせいか暗闇でも目が見えるようになったのであまり使わない。

主に動力とか、調理に使う程度とか……その他諸々。

地底人の生活必需品になったのである。

「へえ…なるほどな

昔の人はがんばったんだな！」

「そうなんですよ！

すごいですよね」

「……っ／／／」

チイの笑顔に見惚れる俺。

地底人って言うから、人間とは違うのかと思ったが
ただ住む所が違うだけで同じだった。

太陽に当たらないせいで、雪のように白い肌。

マグマエネルギーのお陰でいつも温暖というか暑いくらいなのでノ
ースリーブの薄着だ。

それにかなり身長が小さいし、細い。

それだけでも、男の俺には目に毒だって言うのに。。。

「どうしましたあ？」

「…ッ

いやいや、何でもっっ

「ふふっ、そうですかあ」

とにかく可愛いノノノ

見た目だけじゃなくって、このおっとりしたしゃべりだとか色々。

俺のハートにくる……！！

でしから、チに一目惚れ…らしい。

第6話：地底 世界（後書き）

相方・さとうへ
がんばれ！！

第7話・地界の主食は…（前書き）

担当…ねじきむらじ

第7話：地界の主食は…

「深沙斗さん、ごゆっくり召し上がってくださいね」

まるで蛭のような小さな明かりの元、チイはそう言って俺の前に何枚か岩の皿を置いた。

うん。荒削りでも皿とは言えないけど、こついう場に来るとなんとなく趣がある。

俺たちはあの後、チイの家に招かれていた。

本当はこの地底界のエネルギーとやらを見学するはずだったんだけど、どこかの馬鹿妖精が『お腹減ったああ』なんて言い出すからよお……。

それでチイが家に招いて俺たちに料理を持って成している訳だ。

まあ嬉しくないと言ったら嘘になるけど、そういうワガママは勘弁して欲しいぜ。

「……凡人さん」

おっと噂をしたらなんとやら。

さとうーが俺の隣にふわりと降りてきて、きゅっと袖を掴む。

「何だよ」

なんとなく気持ちわりいな。

「私ね、凡人さんなら真っ先にこの料理を見てツッコむと信じてたの」

「んで？」

「ボケ担当の私にはツツコミは不可能です」

「んで？」

「不可能です」

「んで？」

「ふ・か・の・う・で・す！」

「“汝の辞書に不可能の文字はない”」

「ハッ！」

いきなり悟ったような顔をするな。

そして、俺も何か言っちゃってるし。

まあ、流石に俺もこの料理（？）を見た時はビビッたけどさ……でも好きな女の子を傷つけるようなツツコミはしたくないのが俺の心境。

てな訳で何かを悟ったさとうー、俺の変わりに解説ツツコミお願いします。

「ねえチィ」

「何でしょうかさとうーさん」

いきなり本人直撃かよッ。

「私はふわふわとろとろのオムレツが大好きなの」

知ったこつちやねえよ。

「でも貴方の料理はシャキシヤキシヤキーンと真逆ね」

まあ当たってるけど、そんな擬音でじゃ解説にならねえ。

「は、はあ……それがなにか？」

「……………」

「……………」

「お前の人生、シャキシヤキした借金人生かツツ！！」

意味わかんねえツツコミすんなあああ！

全く何なんだあの馬鹿妖精は。

訳の分からないツツコミに加えて、チイの頭をペシコツと叩きやがった。

おまけに暴言は吐くし。

当然の如く、奴には罰としてチイの大量に作ってもらった料理を完食の刑を下した。

言いだしっぺのクセに、『食べたくない』なんて言い出すから悪いんだ。

「さとうー……大丈夫だべか」

「ほっとけ。コレに懲りて少しはまじめになる事を願おうぜ」

俺の足元を歩くケルは、微かに耳を下げる。

良いんだよ。逆にいつも俺に悪さばっかしてんだからコレぐらいの罰はあった方が良い。

てな訳で俺とケルとチイだけでエネルギーを見に行く事となった。

「……やっぱり私の料理はまずかったでしょうが」

しかしながら、チイは俯き加減に俺の隣を歩いている。

「んな事ないって！ あの妖精が言った事は気にしないでいいからさっ」

ああ。必死に慰める俺ってめっちゃ惨めだ。

なんかこういつときってどうして上っ面な言葉に聞こえちまうんだろ。

「奴もちょっとびっくりしただけなんだよッ地底界と地上の食文化の違いつか……」

俺は覚悟を決めて、あの食材へと話題を振る。

「もしかして地底界は“もやし”が主食なのか？」

があああ。とうとう聞いちまったッ！

好奇心には勝てなかったあああ。

だって気になるじゃんツ。だってあの皿に出てきたのみんなもやしだよ？

もやしの御浸しに、もやし炒め、もやしのスープ、もやしのサラダ、もやしのシャーベット……びっくりするじゃんか普通！

でもここまで俺は何も聞かずに耐えてきた。すぐにツツコミを走らせてしまっこの俺が、だ。

誰か褒めてくれ。この俺を褒めてくれえツ。

「はい。地底界はなんせ太陽の光がありませんので、たとえマグマエネルギーで光を作っても植物が育たないのです」

……なるほどな。

確かに懐中電灯のような弱々しい明かりのみで、植物が育つとは考えにくい。

だから逆にもやしの栽培が発展したのかもしれないな。

地底界もエネルギーがあるからといって、何かかしら欠落しているものがあるんだな。

「深沙斗さんは地上から来たんですよね」

「ま、まあ」

実際は異世界から拉致られてきました。

「地上の方は何を召し上がって暮らされているのですか」

「えっ……俺なんか普通に米食ってたけど。おいケル、この世界の住民って基本何食べるんだ？」

拉致られたばかりの俺には、この世界の暮らしなんて分からん。

この間言った村は普通に米とかが主食っぽいけど、間違ってたら嫌だしな。

ここはケルに聞くのが一番だ。

「それは種族によって違うだべ。まあオラの知る限り、地上の人間は米や麦を良く食べてる気もするよつな……」

「ふうん」

「まあオラは、ロウソクと鞭があればご飯三杯はいけるべえッ」

「んな事を女の子の目の前で言うなァッ」

チイがそんな事に興味を持ったらどうする気だドM犬。

でもそんなチイも可愛いかもしれない　　って何考えてんだ俺は！
すると隣でチイがくすくすと笑い出す。

何か面白い元素でもあっただろうか……。

「ふふつ。深沙斗さん達はホントに仲が良くて羨ましい」

「良くは無いよ。ただこいつらのテンポに合わせてるだけっつうか」

「意地っぱり深沙斗も大好きだ……べぶしッ」

ケルが何か言う前に、俺の鉄拳が奴の顔面に食い込んだ。

あの痛みがりようだと暫く無言だろう。

「み、深沙斗の愛の鞭があああ……ぐふふふ」

……何も聞かなかった事にしようか。

するとチイは笑いながら、話を続けだした。

「でも深沙斗さんは皆から頼られてるじゃないですか。さとうーさんも、そんな深沙斗さんが大好きなんですよ」

「そんな事は無いよ。俺って影薄いしさ……アイツが俺に頼ってる理由だって“一週間いなくても誰も困らない”からっていう呆れた理由つか」

「そんな事言ったら私だって……」

チイは急に立ち止まり、俺の手を握ってきた。

思わず声を上げそうになるけど、なんとか堪える。

だってチイの小さくて冷たい手は、少し震えていた。

まるで何かの闇に怯えるかのように。

「私は力もあまりないし……皆みたいに地底を補強したり開拓することが出来ない。もやし栽培しか出来なくて、だから私みたいな女は」

「ち、チイはすごい頑張ってるよッ」

思わず俺の言葉にも力が入った。

「まあ私も認めてあげるわ!」

って、何でここにさとうーが居るんだよッ

何でそんなに上目線なんだよッ

もやし料理食い終わったのかよッ!

「深紗斗の言葉に、チィの反応は 次話に続く！」

「勝手に話し切り上げやがったー!？」

第7話・地界の主食は…（後書き）

ざしきわらし担当が忙しいという都合により

ちよっと中途半端な気がしますが……この話しはここまで！！

次回はそういつ関係上、長くなります

第8話・男の小さなプライド（前書き）

この話は、佐川芭瑠堵が執筆しました。

ちよつと最後のほうが雑ですが、後で訂正します。
少し妥協してお読みください。

第8話：男の小さなプライド

まったく…邪魔しやがって……あんの妖精^{むし}がッ！

「いいじゃーん、ちゃんと食ったしい〜」

「テメーはもう黙れッ！！」

まったく……これじゃ話しが続かなねえよ。

「あ、チイちゃん……馬鹿のせいで切れたけど
続きどうぞッ」

「え、あ、はい……」

やっと、話しが元に戻せた……か？
ま、いいや、とりあえず。

「……でも、私、何も出来なくて
皆に迷惑ばかり……」

「チイちゃん……」

チイちゃんの大きな瞳から、大粒の雫がこぼれた。
俺は女の子が泣いてたら……

どうすれば良いかなんて分からない。
けれど……これだけは分かる。

俺も同じ事を、心の奥で……思ったことがあるから……。

チイちゃんの気持ち……少し分かるような気がした。

「チイちゃん……そんなに思いつめること無いよ！

誰だって、得意不得意があるし

出来ないことがあったって、かまわないんだよ？」

「ごめんなさ……私、つい感情が高まっちゃって……あはは

「んでさ、無理に笑おうとするなよ」

「……え……？」

「泣きたい時は泣けばいいんだ

俺だって、なさけねーけどさっ……泣くし

はは、女々しいだろ？」

「そ、そんなこと……！」

「じゃあ、チイが泣いちゃあー駄目ってことねえだろ？」

「でも、迷惑……」

「かけていいって……気にすんな！なっ??？」

俺は思いつきり笑って見せた。

チィちゃんの泣きそうな顔見たら、不覚にも自分が釣られて泣きそうになった。

け、けど……ここで泣いたらなあー……格好がつかねえし。

「それに、俺だけじゃねー……」

ま、頼りないかもしれんが……ケルだって

……えと、さとうーも居るしな……」

「もーなんで、私のところだけ渋るの〜凡人さあん！」

「うっせ、静かに寝てやがれ!!！」

ブベシヤ!!!!

さとうーを土に埋めてから、話しを続けた。

「せめてさー!

会ったばかりだし、変な奴らだらうけど俺たちを信用してくれな?」

「あ、ありがとう……」

涙はまだ、止まらなかったけど。
チイちゃんは、さつきとは違った
本物の笑みを見せてくれた。

……す、すげー可愛い。

あ、いやいやいや!!

今はそんな、変なこと考えるな！俺!!!

「深紗斗おー」

「あ？なんだよ、ケル??」

「おらを見捨てねえーでけろおおおお!!」

「うお!??」

なに、いきなり泣き出すっ

うわああ、くっつくな！鼻水つけるなあああ

いきなり、泣き出すしベタベタ以上にくっつくケルベルン。
ど、どうしたよー……。

「うう……何でもねーべえ」

「そ、そうなら……良いが……?」

なんなんだよ。

「あ、悪いなあ……」

チィちゃんの事、話してたのに」

俺は悪いと思って、謝った。

「いえ……」

「まったく……こいつら、世話焼けるぜ」

「でも、深紗斗さん……嬉しそう」

「そ、そーか？」

ま、嫌じゃ……ねえーわな、うん。

「あと、私の事……チィで良いですよ？」

「あ、ああ、そ、そか……！！」

その対応はかなり嬉しいもんだが。

いやいや、しつかりしろ！深紗斗！！

これは、あれだ。

ちよつと好意を抱いてる友達的位置ンであつて！！

俺は何に誤解を解いているのだから分らない。

「私も……深紗斗さんが、好きになってしまいました」

「え……」

いま、なんと……。

「私、深紗斗さんの事……」

「は、はいい?!」

やべ、格好悪い……動揺しすぎて声が裏返つた。

で、でも……この展開は……まさか、告白!?

い、いやいや、そんなまさか……でも……。

俺の胸はバクバク鼓動を打っていた。

これは、もしかしたら……小学校の演劇発表会で木役を演じていた
時以来かもしれない!!

……今、え？ってなったやつは、それ以上考えるよなよ？
木の役だつて、立派な端役だ。

俺は手に汗、背中に汗をかきながら
チイの返答を待った。

……が！！

「ぎしゃあああああああ！！！！！！」

ドカアアーン！！

凄まじい鳴き声らしきものと、地響きが轟とんいた。

何が起こった？！

良い所だったのにいい！！

そんな場合じゃないってのは、分かってるけどさっっ

「いったい何が起きた？！」

「あの地響きは……またなの……もうイヤ！」

「ど、どうしたのっチイ？」

「また、来たのよ……獣が」

「獣って……ええ！？！？」

また、そういうのに出くわすのか！俺はああー！！

「どうしよう……また、もやし畑が荒らされちゃうっ……！！」

どうやら、獣はチイの畑の方に居るらしい。
チイは地響きの方へ駆け出そうとする。

「あ、危ないよっチイ！！」

「深紗斗さん、離してっ……！！」

俺はチイの腕をつかんで止めたら……そんなことを！
ちよっと俺……そんな事言われたら凹んじゃう。
いや、まて！今はそれどころじゃないぞ、俺……！！

「駄目だ、チイが行っても……」

「変わらないのは、分かってるわ！
でも……私の畑もあるの……！！
私の居場所……」

「チイ……」

そうだ。

チイの唯一の居場所は、もやし畑なんだ。
力がないチイが、唯一みんなの主食を作れる場所。
それがやられてしまったら、チイは……。

「深紗斗さん、ごめんなさい！」

許してくださいっつ」

「え？」

「はあああああ！……」

「う、うえああああ！?!?!?!?」

チイが俺の手を掴むと、一本背負いの勢いで数メートル先まですつとんだ。

えええ！?ちよつと、チイって力が無いんじゃないか?たっけ?!
だから、みんなの役に立てないとか、そういう風に……。

ギユシヤア……。

幸い、俺は土が軟らかい所へ投げられた。
チイの配慮かもしれないけど。

……痛い……な、泣きそう。

「もぉ〜深紗斗ったらぁーお・ド・ジ」

「うつせー黙りやがれえええ」

くそー！

凄く格好悪いじゃんか！ちくよー！！！！

「深紗斗、平気だべか……？」

「へ、へーき……な訳、ねーじゃねえか！

……お前みたいにMじゃねーから、痛みの免疫が出来てないっつ
うのー！！」

「ははぁ〜照れるべえ」

「褒めてねえーし！！

……ぐふっ……」

痛い……ちよつと（でも、数メートル）投げられただけで
もうこんなにもボロボロ。

ああ、女々しい俺に献杯……。

「しょーがないわねえ〜凡人さん」

「テメーにだけは、言われたくねーよ……クソ妖精」

「助けに行きたいんでしょ？」

「あつたりめーだ！

……でも、俺には力が……」

悲しいことに全くもって無い。

自分で言っけて情けなくて泣けてくる……。

「……いや、でも！

チイを助けるくらい俺にだって!!」

無力で、チイより力がない俺だって！

何もしないで、チイが傷つくのを見ているだけだったら……

きつと……俺のプライド（少量）が廃る!!

「そうだと思つたわ

そんな、凡人深紗斗に……はいつコレ」

「これは……あの魔法ステッキ？！

でも、使えないんじゃない？」

「ちつちつち！

これだから、凡人ツカエーナイは

このさとうー様が、いつまでも空っぽの

ツカエーナイ状態を継続するわけないでしょ?」

「もしかして、貯めた?」

「じゃすつぴんぼん」

「いつのまに……」

「まあまあ、いいじゃない

とにかく今の深紗斗には、必要でしょ?」

そう言っつて、俺の前にステッキを差し出す。

さとうー…今回ばかりは、お礼を言っぜ!…
ま、口には出さないけど。

……言っつたら、付け上がりそうだから。

「さあ、深紗斗!

「これに着替えるべ」

「これ…っつて!?!」

あの時の女装じゃねかよっつ」

「密かに貰っつておいたべえ!」

「今回、絶対着ないからな!」

「着てくれよ、深紗斗お……」

ああっもう!」

そんな犬っころの顔して懇願しても無駄だぞ！！
絶対、チイに見られたくねえよ……。
いやいや、見られてなくても着たくはない。

「でも、深紗斗」

「なんだよ、早く行きたいんだから手短になっ」

「お決まりだから

その女装か、もしくは……それに相当しない服じゃないと
神法は発動しないよ？」

「な、なんだとおおお？！」

すっげー使えないじゃねーかよ！……！

「ほら！魔法陣的な？もんだからさ」

「チクシヨー！！」

着てやるよ！ああ、着てやるさ！……！！」

それでチイが助けられるなら……。

俺は何だっやってやるともさあああ！！

ぱっぱー

……着替え終わりました。

「やっぱ、深紗斗は似合うべえ〜」

「うん、なかなかよね」

「黙れ!!」

さっさと、魔物倒しに行くぞっっ」

* * * * *

「やめて、魔物!!」

「ぎしやああ?!」

「こ、怖くないんだからっ……」

ふっ……私の畑を荒らすなあ!!」

「ぎゃあああああ?!?!?!?!」

その場所にたどり着いた。

が、良いが……かなりの悪状況。

まさに、チイが魔物に襲われんとされているところだ。

「チイ!危ない!!」

昔の俺だったら、怖くて助けにすら飛び込めなかっただろう。ただ、今の俺は自然と足が動いてた。

「?!」

み、深紗斗さんっ!」

「だ、大丈夫か……チィ」

チィを魔物の攻撃から守れることが出来た。

火事場の馬鹿力ってやつか?

助けに行くのに必死だったからだろうか?

何だか分からないけど、とりあえず、格好良く助けられ……。

「いてえ!?!」

「深紗斗さん!だ、大丈夫ですか?!?!」

そう人生、上手く行くはずがない。

チィは守れたものの、俺自身は守れてなかった……。

「深紗斗、20のダメージ!?!」

「さとうー!一々、ダメージ解説を入れるなあ!!」

俺はポケモンじゃねえつつつの………」

色々疲れた。

しかし、ここで心を追っている場合じゃない。

「手当てしないと……っつ」

「大丈夫だよ、チィ

これくらい！」

若干強がりが入っているが、気にしない方向で。

俺は魔物に向かって、叫んだ。

「俺が相手だ！」

「このやるおおおおおおおおお！……！」

ああ、俺の死亡フラグが

たった今、もしかしたら立ったかもしれない。

しかし俺の中にある

ちっさな、ちいーっさなプライドさんが許してくれない。

ここは……格好良く、チィを守って見せる！……と。

第8話・男の小さなプライド（後書き）

おじぎへ〜

お前に回すぞーがんばれww

第9話：深紗斗 VS 火龍（前書き）

前々話では大変失礼いたしました。

今回はビツチリ書かせて頂きましたので、どうぞお楽しみください。
では改めましてご挨拶を。

今回の話はざしきのわらしが担当させていただきました。

第9話：深紗斗 VS 火籠

前回より必然的に魔物VS俺の戦いが始まってしまった。

肩から肘にかけて走る赤き亀裂。動く度にズキリと鋭い痛みと共に血がにじんだ。

今までの俺なら怪我の手当てもしないでこんなところに立っているなんて考えられないな。

じゃあそんなツカエーナイがなんでバトル参戦してるかって？

それはまあ……大切な子を守りたいから。

あまり他人に興味を持たない俺が、弱虫ですぐに現実逃避する俺が、こうしていられるのは……。

俺にも“友達”と言える存在が出来たから。

「おおおおおおおおお。」

まるで心臓を圧迫するような震動を立てて、魔物は低い咆哮をあげる。

その咆哮は俺の頬と共に恐怖心を逆撫でた。

腕もチイの前では強がってみたが痛いもんは痛い。

同時に戦ってやるとは言ったが怖いもんは怖い。

あのピンクのミニスカ衣装から覗く俺の脚は情けないくらい震えて　　ってあれ？

「なんでこんな丈が短いんじゃないやああああッ！」

お、おま……ええええ！？

必死で今まで気づかなかつたけどッ！

前回着たときこんな短くなかつたよッ。ちよつとスネは見えてたけどこんなパンチラ寸前……自分で言うのもなんだけどスネ毛が見えてキモイよッ。殺人行為だよ！

まあ女装している俺も惨めだが、もはや変人だよ。

アレだな……。

分かっていると思うが、こんなイタズラすんの“アイツ”しかいねえ。

「さ、さとうー。てんめえ……」

「わあー凡人さん可愛いッ。でも切つたのは私じゃないみたいない！」

「はッ！？」

お前じゃないって、他に誰がやるっていうんだよ。他にこんな茶目つ気超えた悪戯する奴なんて……。

「やっぱりオラの目に狂いは無かつたべえッ」

……。

「け、ケル。まさか」

俺の隣で頷くどM犬。

「オラがコーディネートしてあげたべえ。やっぱこういう衣装は丈が短い方が萌え……………」

「ふざけんなこらあッッ！」

本日二回目の鉄拳がケルに食い込みましたあ。

当の本人（犬）は『ゲフッ』と地面に食い込んだ。

何やってくれちゃってんのよケルちゃん。ナメてるとマジで磔にすんぞ。

「ダメだよお。ケルちゃんにとってそんなのご褒美にしかないよー」

「そりゃそーだ……………」

もっ心を読むお前にツツコミは入れないよ。

ぐあらああああッ。

おつ。魔物さんも怒ってるよ、開始からシカトし続けてるから。足をバタバタさせて今でもモヤシ畑に侵入しそうだ。いい加減バトルしないと本気でヤバそう。

「み、深紗斗さん……………」

俺の背後で呆然と背中を見つめるチィ。

彼女は俺の女装姿をどんな気持ちで見つめてるんだろう。変態野郎とか女装趣味とか思われたかな……………。

でもさ、決めたんだ。

「チィ……。今は俺に対するツッコミは聞く時間は無い」

本当は聞く勇気が無いだけだけど。

「でもチィの大切なモノは俺にとっても大切なモノなんだ。だから俺は、ソレを守る為に戦いたい」

「み、さと……。さん。どうしてそこまでして」

男ってつくづく面倒な生き物だと思う。

直ぐに強がって、本当はチィを抱えて逃げ出したいけど……。俺はさまざまな想いと傷ついた左腕をギュツと抱え込む。

「キミは“大切な仲間”だから」

“何かを守りたい”。そんな気持ちが先に出てしまう。だから俺はもう振り返らない。振り返ると逃げ出したくなるから。

「　　ッ。チィ、今すぐここから離れるんだ！　それから地底界の偉い人に危機を伝えて指示を仰いで」

「そんな事したら深紗斗さんはッ」

俺は返事の代わりに、魔女っ子ステッキを力強く握り締めた。

「行くぞさとうー、ケル！」

「はあい」

「了解だべえ！」

俺たちの力を合わせれば、きつとどんな敵も倒せる。
仲間の強さを、絆を、チイに見せてやるんだ　……。

そんなこんなで俺たちは苦戦しながらも魔物に勝ったのであった。

「……………」

……。

「ちょっと凡人さん。何都合よくバトル飛ばそうとしてんのさあ」

さ、さとうーの視線が痛いぜ。

「あ、アレだよお前。読者世界とこっちの世界は時の流れは違うのさ。だからあっちじゃ一秒くらいでもこっちじゃ……………」

「あっちこっちを理由に上手く逃げようとしてるべえ！」

「“ ”を上手く使って誤魔化しちゃダメよ凡人さん。それじゃツカエーナイからセコイーネに進化じゃんッ」

でもツカエーナイよりセコイーネの方が使えそうじゃねえか。

「へ理屈言っじゃありませんッ」

ぺしこつ。さとうーが俺の頭を叩く。

だが今の俺には叩かれた事なんてどうでも良い。

魔物はやっぱり大型トラックより一回り大きい巨大な龍。皮膚は赤い鱗に包まれ、炎を纏う手足。何より威厳な顔立ちが近くにいる者に恐怖心を植えつけた。

呼吸するたびに鼻から火の粉が噴出している。

こんなボ モンとかいそう……。

「これは“火龍”^{かりゆう}ねえ。別名・サラマンダー」

「さ、サラマンダー？」

「火を操る魔物。火の神としても恐れられている。確かに火山活動の活発な地下で眠ってるって聞いていたけど、人嫌いで有名なサラマンダーがなんでここに……」

うーんと首を傾げるさとうー。

お前が知らない事は俺に分かるはずがない。

だけど俺の直感がコイツはケルみたいには行かないと言っている。だってさ ……。

「コイツめつちや殺意剥き出しなんですけどおおおッ！」

こつちが攻撃する前に火を纏った牙を俺たちに向けてきた。

俺は間一髪横にずれたけど、これは間違いなく殺される。

がるるるうっ……。

めっちゃ唸ってるもん。

赤い眼ギョロギョロさせてるもん。

「やっぱり俺ムリイッ帰るお家に帰るうっうっ！」

振り落とされる尻尾からも必死に逃げ回る俺とさとうー。

「何よッさっきまでカツコつけてたくせにー」

「バトル飛ばす気だったから少し時間を稼いでたんだよッなのに何だこの状況は。作者は何考えてやがる！」

「キれる所そこッ!?!」

あ、さとうーがまともなツッコミをした　って、今はどうでも良いッ。

俺の脳内ラ○フカードは三枚。

一番『戦う』

二番『逃げる』

三番『死んだふり』

どうする俺。どうするよッ。

「んで結末は、一番『立ち向かうものの炎を吹かれて死亡』・二番『チィに冷たい目で見られて精神的に死亡』・三番『そんなガセネタ信じてるのっ』と世間の目から抹殺されると共に魔物に踏まれて死

「亡」

「“続きはWebで”なんて言えねえじゃんツ “続きはあの世で”じゃん！」

特に三番ヤダよ。精神と肉体が両方やられて死亡じゃんかツ！
てか、俺のOイフカード自体ろくなもんが無い……。

「深紗斗、甘いべえ。あの世で選択するのは“三途の川”と決まってるべえ」

「嫌だよそんな選択ツ！」

何コイツ。なんて不吉なツツコミしてんの。
俺に三途の川を渡れってか？

「てかお前まで何逃げてんのツ戦えよ！」

「オラあんまり戦いは好きじゃないしい……」

「何言っちゃてんのツ何可愛い子ぶってるの！」

「仮に戦うとしても今のままじゃ無理だべえ。深紗斗の魔法を解かなきゃ力も出せないべ」

か　　そ、そっか。俺が魔法を解かなきゃこいつは元の姿に戻れないの
　　って。

「先に言えよお前」

「今言つたべえ」

なんかムカつく。でも俺も魔法が使えるのすっかり忘れてた。変な呪文は嫌だけど『目には目を。歯には歯を』っていうしな。ここは魔物同士の戦いにかけるかッ。

「り、リリカ……」

「ちなみに魔法は一回の補充に対して一回しか使えないからあ気を付けてねー」

……。
……は？

「だあかあら。“一回しか使えないの”」

「……マジ？」

「マジ」

「はああああッマジ使えねえええ！」

「だってツカエーナイの魔法ステッキだもん」

「意味分かんねえよッ」

じゃあ、もしケルが負けたら完全にアウトじゃねえかッ。

あたふたしている間にも火龍は、重たい体を引きずるようにしてモヤシ畑に侵入しようとしている。

てか完全に俺ら無視してるじゃん！

「ヤバい！ チイのモヤシ畑が」

「凡人さん、アレをみてッ」

さとうーの小さな指先。それはモヤシ畑の更に奥を示していた。赤く輝く大きな水晶 いや、火の塊というべきか。

「ま、まさかアレが」

「多分、チイが言ってたマグマエネルギーの核じゃないかなあ」

「なんでそんなのがモヤシ畑にあるんだよ！」

「モヤシの成長を早めてたとか、チイの怪力なら安心だとか……」

うん。前者であることを願おう。

それはそうと火龍の狙いは最初からマグマエネルギーだったらしい。でもモヤシ畑がたまたま通り道になっちまったって事か。

仮に悪気はなかったとしても、許すわけにはいかない。

俺は魔女っ子ステッキを握り締め、立ち上がった。

「よつするにマグマエネルギーを食べたいってか？」

「多分そうかもしれないねー」

ならば……っと、俺の頭に浮かぶ作戦。

「なら、任せろっ」

「ぼ、凡人さ……深紗斗！」

さとうーが俺の名前を呼ぶが、完全に無視。

俺は地面を蹴り、魔物目掛けて全力疾走する。

「お客様。地底界へようこそ」

魔物相手に何を言ってるんだ俺は。

ぶっちゃけ怖い。だって俺は何処にでもいるような凡人だぜ？

普通なら逃げてる。

だけど。

「まず“マグマエネルギー観光地”をご見学前に、ご当地名物で仕上げたモヤシスー
プなんていかがですかあツ？」

俺の馬鹿げた言葉に魔物が振り返る。

コイツはチイの居場所を壊そうとした。

コイツはチイを泣かせた。

俺はステッキを頭上に掲げる。

奴は大きな口を開き、空気を吸い始める。

今だツ。

「リリカル マジ狩る ステッキにある全マグマエネルギーよ、モ
ヤシスーブになーれっ」

……。

……。

.....。

があああああッ覚悟はしてたけどまた唱えちまったああああッ！
耐える深紗斗。今は魔物を倒す事だけを考えろッ。

トゥルルルルル〜ン

ぐああああ。理性をもつえばむム力つく効果音がまた流れたああ。
冷静を保て俺ッ。辛い気持ちは分かっているから俺が一番分かっているから！

火龍はまさに火を吹こうとエネルギーを溜めている。刺激的な橙色が喉の奥から光となって溢れ出す。

「ちくしょおおおッ」

ぽんつと出てきた一般サイズのモヤシスープ皿を持ち、水平に構えた。

お前のせいだ。お前のせいで俺は再び変態染みた事をやる羽目になっただだぞ。

凡人をなめんなああ。

「必殺・お残しは許しまへんでえええええええ！」

frisbeeの如く、魔物の口の中へもうスピードで飛び込んで行く皿。

俺の渾身の忍たま最強攻撃は、たわいなく火龍の口へ命中した。
ふッ。無駄に幼少時代一人frisbeeやってねえんだよ。

「終わったな.....」

ゴクンと、飲み込む生々しい音。

「火龍。お前、相当体温高いだろ。じゃなきゃ身体に火を纏うはずがない」

火龍はピクリと身体を震わせる。

「ちなみに“水は急激に温度を上げると爆発する”らしい。しかもお前が食べたモヤシスープはただのモヤシスープじゃない。“マグマエネルギーの塊”だぜ？」

俺はニヤリと口元を緩ませた。

勝敗あつたな……。

火龍の腹からポフンツと響く爆発音。

ぎしゃやあああああ！

「すっごいすっごい凡人さんッ」

まだ興奮のおさまらない俺の周りを、さとうーがハエのようなウザさで飛び回る。

「なんか見直したよおやれば出来るじゃん!」

「ま、まあな。余裕だぜ」

そういう俺の足は震えてるけどな。

まあ周囲は魔物の口から溢れる水蒸気に包まれてるから見え
ないだろう。

てかやっべえ……調子にのってたら傷口開いたかも。泣きそう
なぐらい痛い。

「俺、こう見えても勉強はそこそこ出来るっていつか……」

「これからはツカエーナイじゃなくて“あんまりツカエーナイ”に
改名しなきゃねえ」

「するなッ何その微妙なランクアップ!」

全く。ろくなもんじゃねえな。

でも何とかなって良かったわ……。だってこんな化け物に本気で
勝てると思っただけじゃなかったし。

口からモクモクと煙を煙を出しながらのびる火龍を見てほっと一
息。

「それより深紗斗お。コイツはどうするべえ?」

くんくんと火龍の匂いを嗅ぐケル。

どうするって……いわれてもな。

「まあ、もう二度と悪さが出来ないようにとどめを……」

「やめてええッ！」

いきなり響く横殴りにするような悲痛な叫び。
振り向けば小さな女の子が息を切らしながら立っている。
炎のように赤い髪。赤い瞳。発達した犬歯。
なんだこのガキ。地底界の子供か？

「えっと……君は誰？」

「わ、わたしは……その」

言葉を濁す少女。

同時に浮かぶ疑問。

「なんか怪しい」

「というか火龍が何をしたか分かってるべかッコイツは地底界を荒らそうしたべえ」

「ケルちゃん、あんたも人の事言えなかったでしょ」

さとうーとケルが好き放題言っている。

でも、俺は少女に釘付けになっていた。

さつきから気になっているんだ。

“なんで俺は彼女の容姿が見えるんだ？”

確かにマグマエネルギーの明かりもあるが、そんなに明るい訳でもない。

うつすらと見えても、色の判別は難しいはず。

「凡人さんも何か言いなさいよ　ってなあに女の子に見とれてん

のッ
」

「深紗斗がロリコン趣味だなんて神様が許してもオラは許さないベ
え！」

「お前ら……あの子おかしいぞ」

「「はぁ？」」

馬鹿コンビもようやくその異変に気づいた。
そう。おかしいんだあの子。

「なんで体が光ってるんだ？」

体の表面がほんのり輝き、周囲を照らしてる。
まるで小さな太陽のように。

「きつと服の中に人間界の必需品・怪獣電灯を入れてるのよ」

「黙れクソ虫」

それいうなら懐中電灯だ。なんだよ怪獣電灯って。
使うとしてもウルト マンぐらいしか使えねえよ。
俺たちが馬鹿やっている間に、女の子がポツリと何かを呟いた。

「……いび」

はい？ なんて言った？

「お母さん”をもっいじめないでええええー！」

“お母さん”……？
誰が、お母さん？

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

背後に感じる熱気。いや殺気か。
俺を覆うデカイ影。
まるで腹の底をえぐるような低い唸り声。

「おいおいおいおい……冗談キツイぜ」

俺は腹を決めて振り返る。

上半身を高々と上げて俺たちを見下ろす火龍。
わああ。こりゃ完全に怒ってるね。
やっべ。足がすくんで動けねえ。
ツウーっと伝う嫌な汗。

「あわわわわヤバイよ凡人さんッ」

「だな」

「早く逃げなきゃ　　ってうわあ！」

俺の一番近くにいたさとうーを握り締め、投げ飛ばした。
同時に迫る火龍の顔。

「凡人さんッ」

さとうーが叫ぶ。

でも俺はもう無理だ。男なら最後ぐらい腹決めるぞ。

「凡人さん逃げてよッ凡人さん　深紗斗おおおおおお！」

迫り来る熱気。

俺は次に来る衝撃にそつと目を閉じた　……。

「さて次回主人公交代ッ新しい連載『ちやめつけ妖精　さとうー』
をよろしくねッ」

……やっぱりコイツ、道連れにすればよかった。

第9話：深紗斗 VS 火龍（後書き）

深紗斗、絶体絶命ですな……。

いったい次話はどうなるやら。なあ芭溜堵よ（笑）

てな訳で芭溜堵、続きは頼んだぜ！

第10話：火龍の珠（前書き）

担当：佑川芭瑠堵です

第10話：火龍の珠

ああ……一貫の終わりなのか。
俺は暗闇の中でそう思った。
……んがっ！！

「お母さんも、もうやめてえッ！」

まさかの展開だった。
この場を制したのは
以外にも、あの幼い不思議なガキだった。
火竜はその言葉を聞くと、さっきまでの殺気が嘘のように……って
別にだ、駄洒落言うつもりで言ったんじゃいぞッ！！
コホン……それはいいとして。
明らかに空気が変わった。
一瞬にして、なんだか……。

「もう良いよ……
わたし、人に迷惑を掛けてまで生きたくない」

「な、何を言ってる……?」

俺は上手く状況を飲み込めなかった。

正体不明なガキはてくてくと、おぼつかない足取りで火竜に近づいていく。

そして、俺のほうに振り返り、無理に笑ってみせる。先ほどより、血の気が引いている感じに見えた。

「お母さんは悪くないの

私のせいなの……ごめんなさい」

「お前……まさか」

やっと俺の思考回路が動き始めてくれた。さつきから火竜を”お母さん”と呼ぶ事。体から不思議な光が発している事。これはつまり……。

「わたしは火竜の子

お母さんは、私の具合が悪いから

人の住む土地のマグマエネルギーまで取りに来たの
ごめんなさい、私のせいで…地底界の人に迷惑を……」

「い、いやあ……俺に謝られても」

正直、どう反応していいやら分からない。
良いんだよって言ってあげたいけど、被害受けたの地界だしなあ。
許す許さないは俺が一概に決めるわけにも行かない。

「もう来ないと約束します

だから、お母さんを殺さないでください」

そう言つと、火竜の母(？)は

それに反対するかの様に、首を横に振つた。

「良いのよ、お母さん……もう良いのっ

わたしはお母さんが、そうやって傷つく方が嫌なの
だから、わたし……うっ……」

急に胸を押さえてうずくまる。

おいおいっ……ちよっとまずいんじゃない？！
さっきから顔色悪そうだったし。

火竜母は心配そうに子供を舐めている。

その顔に、俺を襲った時の恐ろしい表情は無かった。
ひたすら心配している時の母親の顔だった。

「……どうするー凡人さん？」

投げて飛ばしたさとうーがまた寄ってくる。

もう危なくないと察したのだろう。

「どうするって……やる事は、一つしかねえ！」

俺は腹を決めて、火竜子供の所に駆け寄る。

火竜母に近寄るのは怖かったが、俺はそれより火竜子供の方が心配だった。

もうどうにでもなれッ！……という、やげ自棄もあつたが。

「だ、大丈夫か?!」

意を決して、駆け寄る。

怖いけど、それより火竜子が心配だから……。

ギシャアアア!!

火竜子に近寄って行くと

火竜母は子を守ろうと威嚇する。

……マジ怖いんですけどッ。

いやいやいやっ!

今はそんなビビッてる場合じゃない。

「火竜母！」

俺はお前の子どもには危害を加えるつもりはないッ！！
助けたいんだ……ッ」

俺は喉がカラカラになりながらも

火竜母に思いを伝える。

俺の言葉なんて通じないかもしれない。

けれど、早くしないと

火竜子が死んでしまうかもしれないんだ。

俺に何ができるかわかんないけどッ

……何もやらないで、後悔したくない！

だから、どうか……

俺を信じてくれ火竜！！

ギョルルウウゝ

火竜母は威嚇から一変して

なんだか大人しくなつたみたいだった。

……俺の言葉が通じたの……かも？

それを見計らって

俺は火竜子の傍に行つた！

「ハア…ハア……」

「わ、わぁっ……」

「どっしょっしょっしょっ！」

駆け寄って、抱きかかえたままでは良いけど
これから如何するかまでは考えていなかった……ッ！！

「もっしょうがないわねえ凡人さんってばぁー」

「てめッ」

「しょ、しょうがないだろっっ」

人間テンパるところなるんだよ！！
……って自分で言ってる悲しくなってきた。

「しょうがない！」

「こっついつ時はさとうーにお任せ」

「（……ウザイけど、今回は見逃してやるッ）
何か方法あんのか?!」

「凡人さんの神法かけちゃえばぁー」

「………フンッ!」

「アベシヤアーツ?!」

俺は妖精むしを叩き落とした。

……期待した俺がバカだったツ!!

さとうーの発言に重大なミスがあります。
さて、それはどこでしょう?

ぴんぼーん

A こたえ・俺の神法は一度しか使えません 重要事項

「……くそっ

どうすればいいんだ?!」

知識も何も無い。

頭がテンパってるから何もいい案が浮かびそうも無い。
俺って何てツカエーナイなんだツ!!

「深紗斗さん!」

「……チィ?!」

振り向くとそこには、長老らしき人と一緒に居るチイだった。武装している人々も居た。

マズイ……これじゃあ、火竜がツ!!

「待った、火竜は……ッ!!」

「分かっておる」

「はえ？」

長老らしき人物が

今まで見ていたかのように言う。

俺は思わず、変な声が出た。

直ぐにでも武装集団が押し押せてくるのかと思ったから……。

「ワシはこの地界を統べる長老カイザー」

うん、見た目からしてそうだろう。

てかつ何か名前が何気に格好良いなッ!

そんな変な所で感心してしまった俺を他所に

長老は一步前へ出て、語るように言った。

「原因が火竜の童わいわなら全てに納得いく……

今まで何故、人嫌いな火竜が人の集落へ来たか分からなかった

いや……ワシらが分かるうとしなかったのが原因じゃがな」

長老は言い終わると

何かを取り出す動作をした。

「……チイよ、これを」

「はい、長老さま」

何かをチイが受け取る。

な、何をやるつもりなんだ……??

「深紗斗さん！

コレを……ッ」

ヒュンッ……！

「え?!

わ、わわぁ　　ッ!?!」

投げるんかいつ!!

何かが始まるのかと思ったよッ

珍しく反射神経が悪い俺だけど、受け取れた。

……これはいつたい？
紅く綺麗な大きめのビー玉みたいだった。

「それを火竜の喉元に付けてあげてくださいっ！」

「えっあ、ああ、わかった!!！」

何だかよく分からないケド。
俺には指示にしたがうしか術すべはなかった。

俺は火竜子の喉元を見る。

すると、さっきまで気づかなかったある点を見つけた。
火竜子の喉元に少しくぼみがあったのだ。
それはちようど。

「もしかしてッ?!」

その窪みに例のビー玉？を添えると

……ちようどピッタリだ!

ちよっと力を入れて押すとくぼみに入る。

そのビー玉は火が灯ったように光り輝き

みるみる火竜子の肌は血の気が戻っていった。

そして

火竜子は紅い光に包まれて……。

母似の竜の姿になった。

俺はただただ唾然とししか状況を見守るしかなかった。
恐怖の怖さと共に幻想的な場面に、声もあげられないくらいな怖さ。
でも、最後に襲ってきたのは……安堵感だった。

「よ、よかったの……かな？」

「あはは……ッ」

何はともあれ一件落着いてやつかもしれない。

* * * * *

その後。

元気になった火竜子はお礼を言っ
て母親と一緒に自分たちの居場所へ帰っていった。

色々上手く終わって安心したら

不覚にも腰が立たなくなってしまうことは、まあ……気にしない

方向でっ！！

でも、俺的には何が何だか？

状況把握がまったく出来なかったのも事実で。

それをチィで聞いてみたところ……。

『私が長老さまたちを呼びに言ったら

偶然にも子供が拾った玉が”紅宝珠”くれないのほいじゆだったんですよ

』”くれないのほうじゆ？”

『伝承によれば、火竜には喉元に

火を蓄えている珠たまがあるんです

それが取れてしまうと、力を失ってしまうので

火竜の弱点部とも言われている箇所なんですって

なるほど……と俺は納得した。

しかし、子供がそんな大層なもん拾っちゃったよなって感じた。

……まあ、ビー玉みたいで綺麗なもんだし仕方ないかもしれないなあ。

そんなこんなで一応、問題は解決！

地界の町に火竜が来ることは、ひとまず無いと言えるらしい。

コトが終わって

俺たちは火竜と戦った功績を崇められ

地界の豪勢な、もてなしを受けた。

……料理は相変わらず、モヤシばっかなんだけどね。

そして野宿が多い俺たちにとって嬉しいのは
ふかふかしたベットつきの部屋だ。

旅に慣れてないのと戦い続きでくたくたな俺は
涙が出るほど嬉しいものだ！

「よかったよかった」

無事、凡人さんの経験値上げも成功したし！」

さとうーは人形サイズのベットでごろごろ寝ながら行っていた。
妖精にまでちゃんとしたものを用意するなんて、すげえなと思った。
……ここでは普通なのか？と疑問が募った。

「んだんだあ」

よかったべえ深紗斗」

そして、ケルにも

犬が使ってそうなベットが用意してあった。
もう完璧な接待だな、地界は。

「ま、まあ……チイの町も救えたからな！
良しとすつか」

「深紗斗お

また、チイだべ……」

何故か俺の台詞でケルがしょげる。

泣くのは勝手だけど

その残片（涙や鼻水）を俺にくつつけるのは止めてくれ……。

「そついや、これから俺たちどうすんだよ？」

「どうするってえゝ決まってるじゃない
地上へ戻るしかないでしょ」

「どうやって戻んだって話だよッ!?!」

「落ちた穴から出ればいいのわ
ケルちゃんなら戻れ」

「はあ?!」

「あ、しまった……テへ」

「やっちまったべえゝ」

「おい、妖精まじむい?!
てめえー穴に落ちた祭、俺になんて言ったか
覚えてんだろうなッ!?!」

「ハッ

まったくもって記憶にありません」

「くたばれ」

「いやあ〜ん、そんな事言ったら傷ついちゃう」

「うわ、きしょッ……勝手に傷ついてろ」

「……ああ！ずるいだべえッ」

「おらにも罵声浴びせてくれだあー!!」

「変な要求すんな!!」

「いいか、さとうー……てめえは」

『ここはアレあるよ』

『進んでみるべしべし!!』って言ったんだッ」

「細かッ！」

「そんなんだからモテないんだよあ〜？」

「うっせ、黙れ!!」

「とにかく地上に上れる的なことは言わなかった」

「……これに異論はねえ……よなあ？」

「……ごめんなさい、異論ないっす」

「さすがに威圧したら、さとうーが真面目に謝った。土下座入りの真剣だ。」

* * * * *

少しだけ地界で過ごし身体を休めた俺たち。完全とは言いがたいが、何だかんだで急いでる旅なので長居は出来ない。

街総出で落ちた穴まで見送りに着てくれていた。

「貴方様には感謝してもしつくせませぬ」

「そんな良いって！」

部屋とか豪勢な感じのに泊めてくれたおかげでゆっくり休めたしなあ」

「それは何よりですよ」

長老と話しをしながらも目で追うのは……。

「（チィ……見送りに居ねえのな）」

そう、あんなに仲良かったチィ。でもここの見送りに居ないって事は。

「（いや、悪く考えるな！」

そ、そうだツきつとモヤシ畑が急がしいんだ！

そうに決まってる！！）」

自分に言い聞かせた。

その時。

「深紗斗さぁーん!!」

ズドドドドドドッ!!

遠くから凄まじい砂煙が立ち上がっているのが見えた。

……チイ、すっげえ走ってるよ。

騒音がヤバいけどな、気にしないぜ……ッ!

「よ、よかったぁ……間に合って」

「チイ……見送りに着てくれたのか!」

「いえ、違いますよっ!!」

「え、えええ?!」

ハッキリ拒否された。

ああ、俺、やばい、今なら楽に逝ける……。

「……私ッ深紗斗さんと旅がしたいんです！」

「え、一緒に……？」

「だって、深紗斗さんに聞いた話楽しそうだったんだもの……！」

それに……地上の世界がどうなのだが

私の目で確かめてみたいの！

……我侭な事言ってしまうって、申し訳ないんですけど

な、なかなか今日まで言えなくって……えと、それでっ」

チイが一生懸命なのが凄く分かった。

リュックにいっぱい積めて来ていた。

もしかしたら、駄目だと言われるかもしれないのに。

俺の「NO」が言えなくなる位の真剣な眼差しにノックアウトだ…

…。

「わかった

一緒に行くこうチイ！」

「あ、ありがとうございます！」

深紗斗さん

「わぁーよかったわぁ

チイなら深紗斗なんかより戦力になるしい」

「うっせッ！」

「……ライバル登場だべえ」

こうして、チイが俺たちの仲間になり

旅は再び始まった。

第10話：火龍の珠（後書き）

みなさん、新年明けの更新です

かなり久しい感じが否めませんねえ……。

ドンマイって事で。

相変わらず成長していない文面ですいません（汗）

今年も一年、とりっぷが inふぁんたじー世界をどっぞどよろしくお
願います

相方へメッセーじ〜

勝手にパパッとすすめてごめんなあ。。

後は頑張って書いてね

第11話：不穏な動き（前書き）

お久しぶりでございます。

この話はざしきのわらしが担当しました。
少々訂正しましたのでご了承して下さい。

第11話：不穏な動き

“光”^{ひと}を嫌い、“光”^{ひと}を拒絶する。
“闇”^まを好み、“闇”^まに溶け込む。

人が光ならば魔は闇。

闇は人に恐怖、悲しみ、憎悪、怒りを与える存在。
光に交わろうとも溶け合う事も無い存在。

そう。人と魔は交わってはいけない。

交わるくらいならどちらかが滅べば良い。

あの“悲しみ”を味わうのは私一人で十分だから ……。

隸血城 周囲を森と凶悪な魔物で囲まれた魔王一家が住まう城。
外は快晴だというのにカーテンで締め切られ、廊下は薄暗さとし
めじめとした空気が合わさり何とも不気味な雰囲気がかもし出され
ていた。

そんな廊下を足早に歩く人物がいた。

黒いコートを羽織り、フードの隙間から黄金色の髪が見えるだけ
で男か女かまでは分からない。

その人物は廊下で頭を下げる魔物達には目もくれず、ある一室の前で立ち止まる。

顔を少し上に向け、軽くノックした。

「父上、私です……」

「入りなさい」

威圧感ある声が響いたと同時に、その者は扉を開ける。

そしてコートを翻し、父の前に膝を着いた。父はこの世界の魔物を統べる王だ、いくら親子といっても立場はわきまえなくてはいけない。

「久しいな我が息子よ……最近は何やら調べ物をしていたようだが」

「はい。その事についてお話がございます」

父の顔はちょうどカーテンの隙間から零れる光に照らされて良く見えない が、微かに微笑んでいるようだ。

「ほう。お前はやはり優秀だな……話は分かっておる。“アレ”の事だろう」

「父上も気づいておりましたか」

「私を甘く見るな 最初はそんなに気にもしなかったが、どうやらそうもいかんらしいな。何か手は打ったのか？」

父は 否、魔王は手元ある水晶を布で撫でる。

我が息子ならば何か手を打っていると見透かしているのだろう。

そして予想は的中していた。

「はい。サン・ガオスに第一種耐久性魔物を仕掛けました が、
上手くかわされてしまい……。それどころか仲間に加わり、戦争終
結の為に動きだしたとか」

「ふはははッ面白い。お前もネズミ風情に魔物を仕掛けるとはな。
だがネズミが魔物を手なづけ、戦争終結とは大きく出たもんだ」

「確かにそうですが、そろそろ目を付けておかねばならんでしょ」

「そうだな。駆除すべきだが、その分では一筋縄では行かぬまい。
毒を盛るにしても、万が一その死体を食べた魔物が死んでしまつて
は笑い話にもならん」

「全く同感です。単体では問題はありませんが、どうやら“妖精”
がからんでいるらしく」

「よ、妖精……だと？」

「はい」

魔王は顎に手を添えて固まる。

妖精という単語に何か引っかかったのだろうか。

「息子よ」

「はい」

「これは“アレの話”……だよな？」

散々話した挙げ句の果てに、会話の題材についての質問。
当然、彼は戸惑った。

「は、はい。“最近突如現れた（自称）勇者たちの話”ですが……」

「そこまで言った途端、魔王の顔色が変わった。

沈黙の後、無理に笑い冷や汗を滝のように流す。

「えっ……あ、そそそそくだよなツアレと言ったらこの話しかある
まい！ ふ、フハハハ誤解するなよツ分かっておったが一応確認
を」

「……」

「……」

「……一体何と勘違いしてたんですか」

彼は思わずため息吐く。

完全に知ったかぶりをしてたとしか言いようがない。

「か、勘違いなんかしてないわツただ、ただ」

「……」

「……最近、城に繁殖しているネズミ（本物）の話かと」

長い間があいた。

一瞬、状況を飲み込めなかった息子だったがハッと我に返る。

「貴方は馬鹿ですかッなんで私がかが城のネズミの事でシリアス風に報告しなくちゃいけないんですか！」

「ま、魔王に向かって馬鹿とはなんだ馬鹿とは！」

「しかもネズミ駆除に魔物仕掛けるって、ゴキブリに隕石を落とすぐらいスケールでかすぎですよッ考えればわかるでしょ本当に貴方は馬鹿ですか、馬鹿をも超えたハイパー馬鹿ですか！」

「やかましいわああッッああそうだ私はただの馬鹿ではない、ウルトラメタリック親バカなだけだ文句あつか！」

「開き直ったよこの馬鹿！」

「黙れ小僧ッ父に逆らう悪い息子はこれでも食らえッッ」

「ちょッ父上最強魔法は反そ……………」

誠に恐れいりますが作中が乱戦状態の為、しばらくお待ち下さい。
引き続き』とりつぷ INふあんたじー世界』をお楽しみ頂けます
よう心よりお願い申し上げます

「何……？ 妖精が異世界から使者を連れて来た可能性がある」と

魔王は華麗にコートを翻す。

「……はい。まだ未確認ではありませんが」

息子は膝を付いたまま、その父を見上げた。

体中からプスプスと煙が出ているが、ツツコミは受け付けない。

「ふん。妖精め……人と魔は交われないという事をまだ理解していないようだな。交わりは憎しみしか生まん、それ以上もそれ以下もない」

「……父上、平然と話を進めています。が今までの事はカットした前提ですか」

「それに」

魔王が見下ろした先には先程の水晶。

その中には勇者には相応しくない、いかにも弱々しく覇気を感じられない一本縛りの少年が写しだされていた。

「こんな見るからに貧弱な男が、妖精が選り抜いた勇者だと？ フ
ハハハ笑わせるな」

「……私は貴方の腐った根性に泣けてきます」

魔王は拳を高々と持ち上げ、水晶に振り下ろした。
ガシャンツと一気に床に散らばるガラス片。
それは微かに輝き、薄暗い部屋の中は星空の如く。

「……全く、笑わせるな。こんな男に何が出来る、こんな男が我らの争いを 憎しみの連鎖を止められるとでも言うのか」

そういう魔王の拳は微かに震えていた。

水晶で切った傷口から、赤き血液がポタポタと床に垂れる。

「我が息子、魔王の力を受け継ぎし子よ。この一件はお前に任せた」

「わ、私に？」

「お前の目でその男の器量を見て来い。“百聞は一見にしかず”とは良く言うだろ 話はそれからだ」

魔王は自分の血を見つめる。

人と同じ、赤い血。

魔王は拳を自身の目の前で、力強く握ってみせる。

その瞳に映るは憎しみ 否、悲しみ。

『（自称）勇者よ、止められるものなら止めてみよ。この戦い部外者にはどうする事も出来ないという事を私自ら教えてやる』

……。
……。
ぶえつくしよん。

うう寒いぜコンチクシヨウ。

俺は奥歯をガチガチと音を鳴らし、体に突き刺さる寒さに堪える。ぶっちやけ晴れてるからそんな寒くねえだろって言うふざけた奴とりあえず消える。

こちらら地界から再び薄暗い森に逆戻りだぜ？

あそこは温暖だったから余計かもしんねえけど、地上が凄く寒く感じる。

まあ当たり前か。そういう俺の体はビチヨビチヨに濡れてんだから……。

「もう軽く妖怪になってるよおーコケがめっちゃ垂れてるよおーなんか歩き方もものけ姫のデイダラボッチみたいだよおーもはやツカエーナイ“あの黒いドロドロに触ると死ぬぞツ”形態だよー」

「だああああウゼエツ分かりきってる事言うんじゃねえ。てかなんなのお前ツジ○リファンなんですか宮崎さんは異界にまで勢力伸ばしてんですか！」

相変わらずハエのようなウザさで飛び回るさとうー。

確かに俺の髪も体もコケだらけで歩く度にコケと雫が落ちる。まんざら嘘でもないのが余計に腹立つ。

「さとうーそこはちつと違うべえ。ツカエーナイ“その緑色のドロドロに触るとめっちゃ生臭いぞ”形態に訂正だべツ」

「あ、そっか！」

「納得すんな虫ツツーかケルも生々しく訂正すんな！ 俺イジメられちゃうからッ！」

なんでケルまでジオリネタ知ってんだよ。

「さとうーにももの○け姫の絵本を借りたべえ」

まさかの絵本での鑑賞かよッ。

てか、さとうーってジオリ本当に好きだよな。俺を拉致する時モラ○ユタネタ言ってたし……どっから仕入れて来るのか知らねえけど。すると、俺の後ろにいたチィが急に俺のバツクを引っ張る。うおッ何だどうした！

「ごめんなさい……深紗斗さん。私のせいでそんなビチヨビチヨになって、長い髪もコケのせいでノリの養殖みたいになって、おまけに人の命を吸う化け物になっちゃったなんて　もう私、どうしたら良いのか……！」

「何気に一番ビドい言われようだけどワザとじゃないよね。コレ計算だったら泣いちゃうよ俺」

なんかチィの言葉が一番胸に突き刺さった気がするの俺だけかな……。

そんな事より何で俺がこんなビチヨビチヨのコケまみれなのか知りたいだろ？

あれはそう。地界脱出時の事だった　……。

『ケル、お前どうやって登るんだ？』

俺は遙か遠くに見える、地上の光を眺めながら何気なく聞いた。
ケルなら登れるっていうのは聞いたけど、どうやって登るのかな
んて分かんなかったし。

『どうやってって……普通に登るだけだべえ！』

『そりゃあ俺だって分かるさ。だけどそれじゃあお前一人しか上が
れないだろ？ さとうーは飛べるから問題ないとして……俺とチイ
をどうやって運ぶんだよ』

『だ、大丈夫だべツ深紗斗の神法で元の姿に戻れば』

『ふんんんんッ』

『ゲブホッ！』

俺の拳がケルの顔面に食い込む。

てめえ、俺が前話で言った事を忘れたのかよ。

びんぽーん

こたえ
A・俺の神法は一度しか使えません 重要事項

てか前話で確認したじゃん。一応重要事項なんだから覚えようよ。

そんな訳で地界脱出作戦が穴だらけという事が判明したんだ。しかも出発直前に、だ。

そこで急ぎよ新たな作戦を立てられた。

その名も

《K I H》作戦だ。

アルファベット表示なのはあまり意味はない。

まあコレは《ケルちゃん岩ゾリで運んで作戦》の訳だ。ダッセエとか言っちなよッ。

内容は単純。岩ゾリは地界の人達に譲ってもらって、そこに俺とチイが乗る。

たったそれだけ。

一応、ケルに俺達と岩ゾリを合わせても確実に二百キロは超える……と言ったが大丈夫だそうだ。

まあ、奴はDMだからな。

そんなこんなで作戦が決行されたんだけど……うん。何も起こらない訳が無い。

『おっしッ行くべえ！　しっかり岩ゾリに掴まってけるッ』

『おうよッいつでもいいぜ！』

『はいッ』

俺とチイは地界特性の岩ぞりにしがみつく。

次の瞬間　見えない手に引っ張られるように体が後ろへ叩きつけられた。

す、すっげえ遠心力……ッ。

『体中のドMよッオラにチカラをおおおおお！』

『なんつー恥曝しな掛け声で登ってんだお前ッ！』

後ろに乗ってる方が恥ずかしいわッ。

だが、ドMパワーは凄いと思う。

砂埃を立てながら一気に穴を駆け上る。効果音を付けるならまさに“ずどどどッ”って感じだな。

『うおおおおお登り終わったら深紗斗の熱いキツスううううッ！』

……。

……何か聞こえたような気がしたけど気のせいかな。

『深紗斗おおッ』

『何だよ』

『オラに“さっさと登りなッこのダメ犬が！”って言ってけるおッ』

意味分かんねえよ。

『深紗斗のドSさがオラにチカラを与えるべえええ！』

『もう誰かこの子止めてー精神科紹介してあげてええ！』

完全に危ない子だよねッ。

穴を登る以前に危険な所に登ろうとしてるよねッ！

それはそうと、地上の光が一気に大きくなり始めた。
出口が近い。そして脱出する時が一番危ない

『チイ、ソリにしっかりと掴まってッ 投げ出されるぞ!』

または横転する可能性もある。

『は、はいッ』

チイはソリにしがみつき、リュックをギュッと抱き寄せた。
最初は豆粒のような光も、今では俺たちを大きく照らしている。
森の景色が見えてきたッ。

『どおりやあああッ』

ばしゅっ。

ソリが穴から飛び出し、宙に舞う。

……っつッ!

『いぎやあああッ 飛びすぎ飛びすぎいい!』

木々を優に飛び越え、地上から遙か遠い所を浮かんでる俺達。
てか、どんだけスピードだしてんだよッ。

『空飛んでますよ深紗斗さんッ』

チイ、呑気すぎいいッ。

危機感持つてッ 下手したら死ぬから!

『燃え尽きたべえ……真っ白にな』

ケルうつッ。

燃え尽きんな最後までやりきろよ馬鹿！

だが、そういうケルはマジで体の力を抜いてしまった。

ソリと繋がれたロープで何とかはぐれていないが、そのまま落下したら危険すぎる。

『……………んの馬鹿がッ』

『みみみ深紗斗さん！？』

俺は片手を離し、ケルに繋がれたロープを引き寄せる。

とりあえずケルをソリに乗せようッ。そうすればなんとかなるかもしれない。

『お……………っわぁッ』

ガクンッ。

急降下を始めたソリ。

俺はケルをソリに乗せたと同時に、ソリから手を離してしまった。

……………。

……………。

逆に俺がなげだされたあああッ！

『死ぬうつ慣れない事した俺が馬鹿だったあああ！』

ソリの上を飛ぶ（落下する）俺。
てかケルって魔物の中でも丈夫な種族って言ってなかったけ？

……。

馬鹿だ。

自分でも思う、やっぱり馬鹿だ。

『深紗斗さんッ今助けます！』

『ち、チィ……！』

チィが両手を俺の方に伸ばす。

こんなシーン、ジ○リであったよ。

ラピ○タだっけ？ 魔女の宅○便だけ？ 千と○尋の神隠しだけ？
多分あった。若干似たようなシーンが。

やってみたいとは思わなかったけど、そのシーンに少し憧れてい
た俺は内心ドキドキしていた。

充分、呑気だよな俺も……。

俺とチィの手が触れる。

俺とチィの視線が交差する。

これでは引いてもらえば 。

『はあああああああッ』

ドガガガガッバキメキ。ずぼーん……。

「……そんな訳で。ツカエーナイはチイの馬鹿チカラによってソリの前頭部分に叩きつけられ、地面をスリップして尚も止まらず木をなぎ倒して最終的に近くの沼に落ちた　　って訳ね」

「　　って訳ね」じゃねえだろツなんで俺の回想シーンにお前が割り混んできてんだよ！」

俺の耳元でウィンク飛ばすさとうーを、思い切り叩き落とす。

まあ、そういう事だ。後半意識失ったから良く分からないけど。でも死は覚悟したよ。マジで三途の川見えたもん。

「てか私思うんだけど《KH1作戦》って言い換えると《高確率で瀕死になる命掛けの作戦》だよねえー」

「くっそ……さとうーにしちゃ上手い」

でもとりあえず無事に済んで良かったよ。

「っーか思ったんだけど、なんか俺って魔王と交渉する前にコイツらに殺されそうじゃね……？」

すると横を歩いていくケルがいきなり顔を上げて、臭いを嗅ぐような仕草を見せる。

「食い物の匂い　　あと人の匂いもするべえッ」

「ケルちゃん。それを言うならコケの臭いの間違いでしょ」

「……さとうーお前マジで絞め殺すぞ」

俺だつて気にしてだよッ。

好きでコケ引きずつてる訳じゃねえんだよ。
すると、チィも何かに気付いたようだ。

「人の歓声も聞こえます。近くに村があるのかも」

言われて見れば　そうかも。

人の歓声と何やら楽器の音が聞こえる。
多分、この近くに村があるんだ。

「よしッ先を急ごう！」

俺はズボスポと鈍い音を立てながら森を走る。

新しい村でシャワー借りられるかな……。

俺はコケを引きずりながら、歓声の聞こえる方へ急いだ。

“ホーリーオリンポス”

それが、この街の名前らしい。

最初に訪れた村や地界と違い、ここは鎧やら剣やら武装している

人々が多い。

外装も綺麗で、中世ヨーロッパ風の建物が多く並んでいた。ぶつちやけ街の入り口で立ち尽くす俺達は、明らかに場違いだ。

「うっげえ……筋肉馬鹿で溢れかえってやがる」

「ここはホーリーオリンポス。人間側の王家に認められる為に強さを競う闘いの街ねッ」

「えっ。それってつまり」

魔物を倒す為の人材をスカウトする街、って事なのか。

……。
……。

複雑な気持ちになるのは俺だけだろうか。

も、もちろん俺だって魔物は怖いよ。だけどこの間の火龍とか、今隣にいるケルとが見てると。

「深紗斗さん、どうかなさいましたか？」

「えっあ、うん。なんでもない」

いかんいかん。自分の世界に入った。するとさとうーが俺の肩に止まる。

「大丈夫よん、今は一応休戦状態だしね。とりあえず今は筋肉馬鹿によって行われる“強者決定戦”しかやってないわ」

「お前……」

「凡人さんの考えてる事ぐらいお見通しでござある！」

コイツは全く読めない奴だ。

ウザイけどウザイなりにちゃんと理解している。

それは周囲の状況ってよりは、人の心に関する事かもしれない。
まあロクな事しか読まないけど……。

「それじゃあ今日の宿を探そっかつ」

「おうツそれもそうだな」

早くコケを洗い流したいし。

「だけどさとうー。宿に泊まるにしても金が足りないべえ」

……え。

「確かに……。だってさとうーさんとケルさんは無賃だとしても、
私と深紗斗さんの二人で最低二万ペタかかりますし」

……えっ。

「あららーでも出発地点でもらったお金は三千ペタ。ポ○モンの旅
立ちと同じねッ」

「ははは……ちょっと待てよ」

「だって今まで私達ずっと街の人にたかってたもんねえ」

確かにそうかもしれない……けど。

「使えねええええッ！」

てか俺達って何気に貧乏生活じゃねッ？

今までVIP待遇だったから気付かなかったけどやってる事かなりセコくねッ？

「だって“あんまりツカエーナイ”だもの」

「ツカエーナイ言うなッてか微妙なランクアップするなって言っただろうが！」

てか前にこんなやり取りなかったっけ……。

てかもうヤダよ。

出発早々に沼へ落ちるし、宿を決めるにも金は無いし。

どんだけツいてないんだよ。

どんだけ神様に嫌われてんだよ。

そんなツイテーナイの前に出されたのが一枚のチラシ。

……嫌な予感がするのは俺だけでしょうか。

「むふふッ お金がないそんなアナタに朗報！」

「……………」

「なななんと、偶然にも本日強者決定戦が開催され優勝者には百万ペタッ」

「……」

「参加者開始直前まで募集中！」

「……」

「参加者開始直前まで募集中！」

「……」

「……」

「絶対嫌だあああッ」

「言う事ためてそりゃあねえよ深紗斗の旦那あー」

だって意味分かんねえもん。

痛い目見るの確実に俺じゃん。てか、あんな筋肉馬鹿共の頂点に立つだって？

無理無理無理無理無理無理無理無理無理ツ。

だって俺、暴力反対だもん。

その前に一発殴られたら即アウトだから！

「深紗斗なら出来るべえッ“オラ何も出来ないけど応援ぐらいなら出来るわ”」

「お前は黙れドM犬ッ」

他人事だと思いやがってええ……！

「凡人さん、それでも勇者なのッ勇者には必ずこういったお金と経験値を稼ぐイベントがあるのよ！ ポ○モンを一からやり直しなさい必ずあるからッ」

「俺は勇者じゃありません極悪ほんやり凡人・ツカエーナイです
う」

「都合の良いときだけツカエーナイを名乗ってるよこの人！」

「てかポ○モンなら初代“赤”から“ダイヤモンド・パール”まで持ってますう。そんな法則性ぐらいとつくに気付いてるわポケ」

「うわぁー歴代のポケ○ンファンだよこの人！」

知ってるからこそ嫌なんだよ。

そういつのつて絶対強い敵出るじゃん。特に最後。
すると隣にいたチィが拳を握り締める。

えっ何。異様に目が輝いてるんですけど。

「じゃあ私が深紗斗さんの代わりに大会に出ますッ」

……。

……はい？

「だってスツゴク楽しそうじゃないですかッ旅の資金も調達出来るし、何より地底界でのお礼していなかっただですし」

「い、いや……だつてめっちゃ危険だよ。そこら中に筋肉馬鹿ヒーフがいるんだよ？ 肉ヒーフか魚のどっちが良いかと聞かれたら迷わず“肉”ヒーフって答えるような猛獣しかいないんだよッ」

なんかパニックり過ぎて何言つてんの分かんねえよ俺。
でも女の子がそんな戦いの場に出るなんて俺の心が男の恥だと言っている。

「じゃあ私エントリーして来ますねッ」

「ちよっ　待って待ってチィ！」

一人どこかへ行こうとするチィの腕を慌てて掴んだ。
細い腕。まあ馬鹿チカラだけど、この子は一人の女の子なんだ。
チィは不思議そうに首を傾げた。

「深紗斗さん？」

何かさとうーの思い通りになっているようで気に食わないが仕方ない。

「……俺が出る」

「えっ」

「凡人さん出てくれるのお！」

驚きの表情を見せる一同。

これは期待されているのか、それとも心配されているのか……。

俺は顔を反らす。

「チィに怪我をさせる訳にはいかないだろ……確かに何の力も無いがこの街のエネルギーを溜めれば神法が使える。勝ち目が無い訳じゃないだろ」

「でも……」

「大丈夫。ホラ、俺ってやれば出来る奴だからさ」

チィを心配させないようにと、俺は頭を撫でてやる。

そうだ。勝てば一気に旅の資金については心配いらなくなる。前向きに行こうッ。

痛みの後には快樂が待っている　ってなんか俺がドMみたいじゃねえか！

一人頷く俺の隣でチィがボソリと呟いた。

「でも私、あの人たちの筋肉を間近でみたいなあ……」

……。

……俺は何も聞いてないぞお何も知らないぞお。

この続きを聞いてはいけない。そう思っているのに、残酷な一言は吐き出された。

“「私、ガチムツチヨな人に凄くあこがれるんです」”

ガハッ。

俺は思わずその場に倒れこむ。

そんな馬鹿な……。ありえない……。

「ツカエーナイツ精神的に一万ダメージ、ツカエーナイ瀕死した！」

「オラがいるべえ……。げふふふ」

この致命的な一言を放たれた状況に、さとうーとケルが肩を震わせて笑いをこらえていたのは言うまでもない。

……。恵まれない。

第11話：不穏な動き（後書き）

後書き

もはや明けちゃいましたがおめでとうございます《笑》
前話で相方が挨拶しておりましたが、今年もよろしくお願い致します。

余談ですが深紗斗が持つてるポ○モンシリーズは“ダイ○モンド&
○ール”となつていますが、彼はソウ○シルバー&ハード○ールド
が発売された事をしりません《笑》
もし無事に元の世界に帰つたら歴代ファンとして落ち込むんだろう
なあ どうでもいい

今回の話、伏せ字やアウンスが入ったりと滅茶苦茶で申し訳あり
ませんでした《汗》

なんか自分の中で何かが外れたんですよね多分
相方の影響だな……《え》

く相方へく

好き勝手やりましたごめんなさい（棒読み）
こんな感じなんで次話も頼んだぜい

第12話：筋肉フラグ（前書き）

担当：佐川芭瑠堵

第12話：筋肉フラグ

「（逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ……ッ！）」

聞いたことがあるセリフだっけ？

……気にしたら負けだぜ。

いや、でもマジで余裕ないんだって俺。

それもこれも

俺が”強者決定戦”なんて無茶なものに出ようなんて
言ってしまったために、こんなにも精神的余裕が無い。
でもさ……

女の子に出場させて、俺が応援だなんて格好つかねえじゃん！！
そりゃチイは普通の女の子より力あるけどさ……。
けど、ここで引いたら男が廢るッ！！

「だったら、早くエントリーしてきなさいよぉー」

「わ、分かってる……」

けど、土壇場になるとどうも足が動かねえ。

はぁぁ……情けないよ、ホント。

エントリー場所ならんでる野郎ども。

みんな、筋肉むっちゃなんだよーッ！！

ぜってー！握りで骨折させられるってえッ……っう。

「やっぱり、私が行った方が……」

「いや、チイ大丈夫だつてえ！

任せろ！絶対俺が一番に」

「随分、自信あるんだなア？」

「えっ……」

後ろからなんか、大きな声が掛かった。

なんか嫌な予感がする。

ああ、俺の嫌な予感は外れたことが無い、残念ながら。

振り向くとそこには

俺より大きな大男がいらっしやいました……。

「けど、その割には屁っ放り腰なんじゃね？

出ないほうが身のためだと思っがなあー」

「な、なんだと……ッ」

「藻なんか付けて

隠れ蓑でもやる気ですかーってんだよ」

「う、うるせー好きでつけてんじゃねーよッ」

「へえ……結構吠えるんだなア

でも尻尾巻いて逃げたら、そこらの野良公と変わんねえよなア？」

くそっ馬鹿にしゃがって……。

いくら平和主義で温和な俺でも腹立って来たんだけどッ。

しかし、大男はさっきのからかってきた雰囲気から一変して目付きがギロツ険しくとなる。

殺気みたいなオーラが漂い始める。

明らかにヤバめな空気が変わったのが分かる。

「……エントリー場で縮まってるヤツなんか

この大会で勝ち残るなんて無理なんだよッ!!」

「ッ!？」

「「「深紗斗?!」」」

振りかぶられた大男の拳。

凄い勢いで俺の顔面目掛けてくる。

俺は避ける事も出来ずにそのまま決まるのかと思った。

……が、一向に衝撃が来ない。

あれ?と違って目を開けると……。

「おいおい、まだ大会始まってないんだぞ！」

「な、何でえーテメエ?!」

俺の目の前に現れたのは

さっきの大男をさらに上回る

筋肉むつきむきのやつだった……!

大男の勢いがついた拳を

あんな片手でやすやすと止めるとは。

悔しいけど……凄いい、格好良いッ!!

「俺?俺はテロス!

正義の味方だッ!!」

「なんだテメエ

ふざけた事言いやがってッ」

「ふざけてんのはお前だ、ばっきゃろー!!」

「ゴブシッ!?!」

テロスの一撃パンチ大男の頬にクリティカルヒット。

……大男が一発KOされたよ。

すげーな、おい。

「戦いは正々堂々！」

試合でケリつけるのが、あれだろうが！
えと、そうッ……マナーだぞ……！」

「あ、あの……マナーって言いたいの？」

「ハッ？！」

そ、そうとも言う……！」

いや、言わねえ……」

力は強いみたいだが、頭は弱いようだ。

助けてもらってこんな事言うのは駄目だろうけど。

「良かったね、凡人さん

顔面にひび割れなくて」

あーウザイの飛んできたよ……」。

てか、何気に酷いよね？その言い方。

「ホント良かったべえ……ッ

おらの大事な深紗斗になにかあったらあ……！」

「いや、心配してくれてありがとうだけど

”お前”のもんじゃないからね、俺は」

「つれない所もおら、大好きだべ……」

「はいはい……つてえ、鼻水つけんなバカッ!!」

あーもう

なんでケルはこのパターンなんだよッ!!

「あっはっは!

お前、ずいぶん仲間に慕われてんだなッ」

「そうなのかな……」

あ、さっきはありがとな」

「気にすんな

俺がそうしたかったただけだぞ!」

にかつとテロスは笑って言った。

はあ、格好良いなホント。

これくらい、さらっと言えたらチイも……。

あれ? そういえば……。

さっきから会話に混ぜられてこない。

振り向くとチイはさっきの位置に固まっていた。
心配になって、俺はチイの所に駆け寄る。

「チイ、大丈夫か」

「格好良いです……」

「えっ……」

そうチイはつぶやいた。

あれ、これってまさかの……。

チイの恋フラグたったパターン!?

あ、いやいやいや……ッ!!

まさか、そんな事はねえよ、うん!

「凡人さんがまた現実逃避してるっー」

「おらなら深紗斗を幸せに……」

「お前等、勝手なこと言うなーッ」

ああ、俺の心が折れそうだ。

薄々……というか、ハッキリ気づいてたけどッ

チイはどうやら……筋肉質の人に弱いらしいな。

「凡人さん敗れたりい〜」

「……………フンッ!〜!」

「ぐべしやああああ!〜?」

俺はいつもの様にさとうーを叩き落とした……。

* * * * *

「はい、選手登録完了じゃぞ」

「あ、ああ……ども」

「試合は明日じゃから」

それまでゆっくり宿で休息をとるなり

鍛錬するなり好きにすれば良いじゃろう!」

受付のじーさんいわく

選手には宿と夕食が用意されるらしい。

これでやっと藻から開放される!

俺たちは選手とサポート役の宿屋へ向かう。

出場登録はただ名前を記入するだけの簡単なものだったが……俺がどうして決意したかは明らかだろうから、恥ずかしい話だ。そ、そりゃーあんな場面見れば。

「コソコソ……ねえ、やっぱり凡人さん気にしてるわッ」

「コソコソ……ああ、深紗斗健気だべえー」

「……お前等、聞こえてんだよッ！ー！」

なんだよ、コソコソとかあからさまに言いやがってッ
それにわざと聞こえるようにしてんだろ！？

「だって、面白いんだもん」

「また、埋められたいのかお前は！ー！」

「きゃあー凡人さんが苛める〜チィ助けてえー」

「お、おい……」

チィの方へ飛んでいくさとうー。

ちよろちよるとチィの周りを飛びアピールしているが……。
そのチィはというど。

「はあ……」

さつきから、ため息をつき上の空。

それだから何回か転びそうにもなってる。

そんな所も可愛い……じゃなくてッ

やばいよな……

これはフラグがものっそ立っているッ?!

「さて恋敵こいひたが現れてアタフタな深紗斗!

果たして明日のバトルに勝ってチィの心を射止めることが出来るのかッ?!

「次回『ムツチヨに囲まれて』

『ムツチヨにノックダウン』

『ムツチヨを目指せ!』

の二本立てでお送りするだ

べえ
」

「お楽しみに

……あ、特にさとうーをよろしくね
」

「わあ楽しみですね、深紗斗さん!」

「もう、ツッコミ役から降りちゃ駄目?

てか降りていいよね?!

誰か切実にツッコミ求む……」

俺は宿屋に着く前にライフゼロになりそうな勢이었다。

第12話：筋肉フラグ（後書き）

あんまり話進まずでスイマセン。

次回、順が回ってきたら、もっと頑張りたいと思います。

今回の話はツッコミ不可で。。

そして相方へ！

こんな回し具合でスマン（土下座

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5001g/>

とりっぷ INふぁんたじー世界

2010年10月10日01時25分発行